たる青龍寺の塔中に於て、二人となき高德の譽れは空海の身邊に降り來りぬ

ある日、和尚は空海を膝下近く招き寄せ、さて改りて

『居れ、われ汝に昔譚せん』と云ひぬ、空海は珠數爪繰りて座を進む

『思へば早や五十餘りを過ぎつる、われまだ稚兒にてありし時、初めて廣智三藏に見ゆ參らせたるに、三藏一たび見させられて、憐みたまうこと子の如く、内に入り、寺に歸るに、影の如く離れず、月に從ふ星の如し、竊にわれに告げ給ふやう、汝密藏の器あり、努め力めよ、努め力めよ、と、やがて兩部の大法と秘密の印契とを授け給はる、自餘の弟子衆、道と云はず、俗と云はず、或は一部の大法を學び、或は一尊一契を得て、未だ兩部を兼ね貫くもの無し、師の大恩、まことに山岳も啻ならぬ、されば生きて岳瀆の恩を報じ奉らんと思へど、此の土の緣已に盡きぬれば、久しく駐まり難し、汝よく聞け、兩部の大曼荼羅、一百餘部の金剛乘法、幷びに三藏傳來の寶物、供養の器具、總を擧げて汝に授くる、學成り、業終らば、速かに本國へ持ち歸りて、海内に流傳せよ、われ汝が當所へ來らんことを知りて、命の

足らざるを恐れたれど、奇緣盡きる時なし、今は有る限りの法を授けて、經藏の功亦畢りを告ぐ、早く日本に立ち歸りて、國家に奉り、天下に流布して蒼生の福を增せ、然らば即ち四海泰く、萬人腹鼓を打ちて樂まん、佛恩の深きを謝する道こゝにあり、師德に報ゆる道こゝにあり、且は國の爲めに忠、且は家の爲めに孝、汝が此の土に於ける使命、庶幾はその全きを爲す時あらん、努め、な、忘れそ』

諄々として說く時、その詞香り、娓々として語る時、その聲句ふ、空海は感涙に咽びながら

『されど此くまでの大恩を報し奉らず、鄕國に歸り去らんこと、且は恐れ多き限りでございます』と答へぬ

『いや』と和尚は遮りて『本土には義明供奉がある、傳道布敎の事、彼の僧の手にて行はる、汝は夫れ早く行け、そして密敎を東方に傳へよ、これ我本願なり、併せて高祖如來の御遺志なり、努めよ、努めよ、努めよ』

云ひ終る時、紫の雲大塔の上に群りて、紅葉法の雨を降らすが如く散りぬ

（二）

あはれ空海は何に因りて師恩の深きに報ひ奉るべきかに迷惑しぬ、原より一介の學僧、身に着くるは薄き衣、手に携へるは一聯の珠數、眞に優る寶無しと聞けば御側にあらん限り、懸命に介抱して、切て報德の萬分一を盡さんと思へど、形無くては紀念とならず、後々に遺る物なくては、心の色を見せ參らする要ぞ無き、心副はずば錦綉の貴きも穢土の如く、心添へば襤褸も又た錦なり

古りたれど袈裟一領あり、疎末なれど手香爐一個あり、倶に本土より持ち來る、怒濤船を弄ぶの朝、潮の餘滴雨の如く注ぎ、寒風皮膚に砭する夕、衡州の岸に心香を炷く、何れも思ひ出多き品、何れも生死の間に伴ひし物、いで之をお手許に參らせて、空海が景慕の情を盡さん

空海は斯く覺悟して「青龍和尙に衲の袈裟を献するの狀」一編を認め、垢付きたる袈裟と、手香爐とを添へて、惠果の座右に進らせき

『生緣は海外、時は是れ佛後、迷霧に掩はれて惠日の見難きを嘆き、影を蒼嶺に

通れて、飾を緇林に落せど、三密を一法に朗かにし、十地を一生に究むる如きは、空しく英響を聞くのみにて、未た其人を見ざりき、伏て惟みるに、和尙は所謂三身の一身、千佛の一佛にて在す、空海幸ひにして洒掃に厠り、甘露に浴することを得たり、悲喜分に非ず、身を粉にして何んぞ答へん、鴻澤に報せんと欲するに一珍奇無し、唯麁衲の袈裟と雜寶の手鑪あり、以て丹誠を表はす、願はくば慈悲を垂れて領したまはんことを』

これ其の狀の文章なりき、惠果は頰笑みて受領しぬ、空海が丹誠を表はしたるの狀は、手筥の底深く納め、袈裟は自ら頸に懸け、手香爐は卓の上に置きて、手づから名香を炷しなどす、心に死期の近きたるを自覺せる和尙は、斯くして現世の緣を懷ぶなり、目前に迫れる死の影を見ながら、寂然として法弟の贈物を弄ぶなり

空海は師の姿を次の間より偸み見て、幾度涙を拭ひたるかも知れず、白雪の眉長く眼を掩ひて、佛相圓滿なる面の上に、日ごと衰弱の色加はりて、神々しき事云ふばかりぞ無き

（三）

その年も盡きんとして、十二月十五日（唐の永貞元年）の夕暮、霰交りに落葉散る、古龕香冷かにして、寒風蕭かに扉を叩く、外には夕暗深く立ちて、裡には法燈早や滅びんとす、堂に滿つる門弟子、外に溢れて淋しく立つ緇衣の衆、その數幾百人と數知れねど、皆な肅然と垂頭れて、宛ら水を打ちたるが如く靜なりき

時に靜寂さを破りて鳴るは、大德の手に爪繰らるゝ水晶の珠數の響き、堪ねかねて注ぐ涙の襟を傳ふ音、泉心に落つる水の流れも、今宵は心ありて聲を秘すが如く庭の松吹く夜の風も、和尚の入滅を悲むか、いつも程に音を立てず、夜は森々と更けて行く

『空海やある、空海、空海』

深く閉ぢたる眼を徐に開きて、惠果は容を正す如くにしぬ、數日以來側を離れず、一心を籠めて介抱看護せる空海は、法衣の袖寒く進み出る、然も悲みに胸を閉ぢられて

『御前に……』と云ひたるのみ詞なかりき

『聞け、諸弟子皆な聞け、諸來の經律論疏章傳記、幷びに佛菩薩金剛天等の像、三昧耶曼荼羅、傳法阿闍梨等の影、及び道具、幷びに阿闍梨の付屬物等、目錄都合六種、新譯等經都て一百四十二部二百四十七卷の中、大廣智不空三藏和尚の譯、一百十七部一百四十九卷、次に二十四部九十七卷、梵字の眞言讃等都て四十二部四十四卷、論疏章等都て三十二部一百七十卷、以上三種總て二百十六部四百六十一卷、次に佛菩薩金剛天等の像、法曼荼羅、三昧耶曼陀羅、幷びに傳法阿闍梨等の影共一十鋪、即ち大毘盧遮那大悲胎藏大曼陀羅一鋪（七幅一丈六尺）大悲胎藏法曼荼羅（三幅）大悲胎藏三昧耶略曼陀羅（三幅）金剛界九會曼荼羅一鋪（七幅一丈六尺）金剛界八十一尊の大曼荼羅一鋪（三幅）金剛智阿闍梨の影一鋪（三幅）善無畏三藏の影一鋪（三幅）大廣智阿闍梨の影一鋪（三幅）一行禪師の影一鋪（三幅）われの影像一鋪（三幅）幷びにわれの付屬の物、佛舍利八十粒（此の中に金色舍利一粒あり）刻白檀の佛菩薩金剛天等の像一龕、白繖の大曼陀羅四百四十七尊、白繖の金剛界曼荼羅一百二十

尊、五寶三昧耶金剛一口、金銅の鉢子一具二口、牙床子一口、白螺貝一口、取り分け此の八種は、本是れ金剛阿闍梨南天竺國より持ち來りて、大廣智阿闍梨に轉付し廣智三藏又たわれに授けたまひたる物、まことに傳法の印信、萬生歸依の物なり、ゆめ疎畧あるべからず』

大和尚は云ひかけて一息ついて

『それを外にしては、健陀穀子の袈裟一領、碧瑠璃の供養鋺二口、琥珀の供養鋺一口、白瑠璃の供養鋺一口、紺瑠璃の箸一具、次に道具として、五寶五鈷金剛杵一口、五寶五鈷鈴一口、五寶三昧耶杵一口、五寶獨鈷金剛一口、五寶羯磨金剛四口、五寶輪一口、已上各佛舍利を着く、次に五寶金剛橛四口、金剛盤子一口、金花銀閼伽盞四口、この九種十八事は楊忠信趙吳をして新造せしめたる道具なるが、此等の物一切を擧げて悉く汝空海に轉付する、本國に立ち歸らば護法弘法の資にもし、又た今日の別れの思ひ出にせよ』

十日餘りも食を斷ちたるに似ず、その聲は淸く朗かに、堂の內外に響き渡りぬ、

空海は只有難涙に暮る、諸弟子は謹んで旨を受けて、誰一人異議を云ふもの無かりき

此等請來の經文影像道具等は、皆な悉く本國へ持ち歸られて、夫々に分ち藏められたるが、千有餘年の長の間に、空しく散逸したるもあれど、その儘に保存せられたるが、高野山の御影堂、京都の東寺、その他にも多くありて、大部分國寶に編入せられあるぞ貴き、本書の口繪に揭げたる寫眞の中にも、惠果和尙傳來の物少からず、見る人幸に心したまへ

（四）

時はますます移りて、淋しさもますます加はる、惠果は讓るべき物悉くを空海に轉付して、心更に淸々しさを覺ねたれば、寂然と端座すること二晌あまり、漸う淡う爲り行く燈火を見詰めながら

『早や何時ぢや』と問ひぬ

空海と俱に師の傍を離れず、眞心もて介抱し居る義明供奉は濕みたる目を伏せて

『彼是天や明け申さう、丑の下刻の鐘を聞いてより、餘程の時を過ぎておはすに』と力なき聲にて答へぬ

『臨終の期が次第に近く、諸弟子衆に今生の暇乞せう』

惠果は斯く云ひながら、枯木の如き身に居住居を直しつゝ

『現世の緣こゝに盡きて、我は今長い眠りに入り申す、改めて說き示すに及ばねど、両部の大法は如來の秘藏、成佛の經路とある、普く法界に流轉して、有情を度脫せんことを冀へよ』

嚴に斯う云ひ掛けたるとき、諸門人は一人として顏を搔ぐる者無く、伏目になりたるまゝ聲を擧げて泣きぬ、惠果は一わたり諸弟子を見廻して、いと靜に

『日出れば月かくれ、油盡きぬれば燈火消ゆ、これ自然の理なり、されば菩薩も止まりたまはず、如來もいつかは滅したまふ、骨肉には限りありて、靈魂には限りなし、現世の緣盡くる時、靈魂は身を放れて、廣く宇宙に遍滿せん、人間の眞こゝに歸する、われ今その時來りて、別れを諸弟子に告ぐ、嘆くべからず、悲むべか

らず、傳うべき眞契は皆な傳へ、開くべき秘藏は皆な開きぬ、唯眞言一家の印信道具、これを唐土に止めずして、日本に送る、仔細稽うべく說くべからず、まことに空海は兩部の檀儀印契を受く、漢梵差はず、溫奧を盡したる事、瓶を瀉すが如し、東方密敎の祖とならん、歸期已に迫る、諸弟子、禮を以て送るべきぞ』

その聲堂に籠りて、誠精の氣人に迫るを覺ゑき、大和尙は快げに

『時迫る、いで沐浴せん』

平生に異る處もなく云ひぬ

諸弟子は心許なく思ひたれど、引き止めんやうはなく左右前後より扶け持ちて、湯殿に伴ひぬ、大和尙は靜に蘭湯を浴び終りて、潔く新しき衣裝に着かゑ、右脇を下にし、西方に向つて牀に就きしが、『さらば、さらば』と云ひながら毘盧遮那の印を結ぶよと見る間も無く、眠るが如く往生の素懷を遂げぬ、春秋六十、法夏四十とぞ聞ゑし

蘭は折れぬ、玉は碎けぬ、諸弟子涅槃の枕を取り圍みて、天に叫び、地に泣き伏

したれど、九原道遠く、白玉樓距たりて、寒巖の空しく横はるを前に見るのみ

されば諸弟子は、泣く〳〵遺骸を東塔院の道場に移して、こゝに最後の營みを勤めぬ

兎角するほどに天は明けて、寒鴉凍雀とり〴〵に簷へ集り、蠟梅白椿花自らに濕りて、情有るも、情無きも、さながら大和尚の入寂を傷むが如く寂しく見ゆぬ

（五）

幾千の門人、道俗の差別無く集ひ來りて、哀悼吊亡の誠を盡す中に、空海は取り分けて悲嘆の淵深く沈みたり、一呼吸の間も遺骸の傍を離るゝに忍びず、獨り道場の夜の淋しきに座し、華を佛前に供へて、紅涙を三衣の袂に包み、香を牀下に炷きては、心愁を幾萬遍の持念に示す、具に追懇の心を致す時

『空海、空海』

と嘎れたる聲にて呼ぶ者あり、徐に目を開きて見れば、思ひ掛けぬ師の大和尚が笑を含みて目前に立ち居たりき

『お、我師、何として……』

空海は宛然として異る樣も無き姿を見、嘎れてはあれど平生と同じ聲にて呼び掛けしを聞き、今朝入寂の悲みも忘れて、取り縋るやうに斯く問ひ掛けぬ

『言ひたき事ありて姿を現じつる、汝まだわれと汝との宿契深きを知らであらう』

惠果は再び云ふ、空海はやゝ異しみて

『何事も……』

『爾うあらう、我と汝とは、多生の中、相共に誓願して、密藏を弘むべき約束あり、彼と此と、世々互に弟子師匠となること、只一両度のみにはあらじ、汝遠く來りて、我法を學びたるも、われ汝に勸むる所ありしが爲ぞ』

『幾世をかけて大恩は忘れませぬ』

『然も受法こゝに終り、吾願ひ已に足る、汝は西へ來りて我足を戴きたるが、われは東に生れてやがて汝の室に入らん、今は久しく止まるまじきぞ、われ汝に前ち

て去らん、さらば』

言ふ聲耳に殘りて、姿は已にあらざりき、空海愕然として四邊を見るに、遺骸花の香に包まれて前に横はり、香烟絶ゑ〳〵に石床の上を迷ふ、夢か、夢にはあらじ幻か、幻にもあらじ、聖靈未だ去らず、三界五趣の間に遊びて、正法をひろめ、衆生を度したまふ、宛らに活けるが如く告げたまひたるお詞に由りて思へば、來世は日本に生を享けて、われと共に密敎の弘通にや力めたまはん、唐土にては大和尙我師とならせられ、日本にては我れ大和尙の師となる約束か、香象は香象をもて友となし、輪王は輪王をもて父となす、師と云ひ、資と云ふ、皆な成覺の如來、得道の薩陀なり、我聞くむかし伽葉佛の時、二人の菩薩あり、兄を日珠と曰ひ、弟を月鏡と曰ふ、互に願を發し、契を結びて、生れかはり、活きかはりて、捨てず、離れず、同じく知識を學び、正法を建立せんと誓ふ、釋尊入滅の後、日珠月鏡は馬鳴龍樹と現はれて、外道の邪林を摧き、如來の法輪を轉せりといふ、我師と、我と、その因緣日月の兄弟に似たる處なからずや、斯くて、宿願空しからず、誓約

よく協ひて、東方に密敎を弘演せば、國家やがて安穩ならん、衆生やがて幸福ならん

師の靈留まり在しまさば、われの誓ひを容れさせたまへ、生々處々相離れず、只管密敎の爲めに盡し參らせん

惠果大和尙の遺骸は、翌年（元和元年）正月十六日、城の東猛村獻原大師塔の側に葬る、會葬の門弟子四千餘人、四衆の合會地に滿ち、萬人の悲感天を動かしき

空海は諸門人に推されて、大和尙の碑文を選み、『日本國學法弟子苾芻空海、撰文并書』と彫みぬ、唐土大德雲の如く、學者林の如く多き中、特に推されて筆を執りて、大和尙の碑文を書きたるは、空海の盛名いかに朝野に囂しかりしかを想見すべし

青龍寺に燈消ゑて、餘光遂に日本に移る、空海の偉力雲の如く、全唐を壓したるなり、空海の信念熱火の如く東方に引き付けたるなり

第十六章　神驗

（一）

去年の冬、日本より着到せし遣唐使判官正五位上高階眞人遠成は、時の帝憲宗の御榮ゑ芽出度く、正月八日（我朝の大同元年）中太夫の位記を賜はりき、まことに前代より聞きも及ばぬ譽ぞと、一行の官人は云ふに及ばず、空海速勢は原より彼地に留學せる人々まで、自然に肩身廣きを覺えたりき

空海最初の豫定は、留學二十年と云ふにありき、先輩の人々が遠く唐土に入りて一法一宗を研磨し歸るには、十年十五年をも尙長しとせず、遠きは奈良興福寺の玄肪僧正、近きは近江國梵釋寺の永忠和尙、俱に入唐十數年を經て、僅に學業の成るを見る、然もわれは努才、玄肪永忠二僧正の器を以てすら、十數年を研究に費して尙密敎の端をも窺ひ得ず歸朝しき、われ幸ひに命あらば密敎の奥儀を極め、更に唐土に行はゝ宗敎の各派に亙り、日本に傳うべき物あらば、繪畫、彫刻、醫藥、天文に至るまで、有らゆる學問藝術をもて歸らんとの志望燃ゆる如くなりければ、留

學少くも二十年を要するならんとの見込を立て、如何なる艱苦を凌いでも、望みを遂げでは止むまじとの覺悟をもて渡唐したれど、幸ひに惠果大和尙の知遇を得、長安に名だゝる名僧智識に近づくを得、已に密敎の全部を傳承し、更に諸種の經義にも分け入りて、畧精通の域に進み居たりと云ひ、逸勢の如きは、支給せらるゝ所の衣服糧食をもて、僅かに露命を繋ぎ得るに止まり、束修讀書の費用にもさし支ゆる程苦しき間に、兎も角一藝を立て得たりと云ひ、共に本國への土產あり、共に身を飾る錦は着つ、いつまで留學しあらんよりは、一日も早く本國へ歸りて、學び得たる密敎の主意を廣め、學問藝術の光りを現はして、衆生を濟度し、萬民を敎化せんには如かず、今年の三月には明州より纜を解きて、一行歸朝すべき豫定なれば、沙門も、逸勢主も、同行の事に定められよ、とは、眞人が空海等に對面したる時、第一に切り出したる口上なりき

逸勢は歸心箭の如き折柄、空海は、惠果大和尙より、早く歸りて三密瑜伽の眞乘を弘傳して、國家人民を濟度敎化せよ、との遺言を聞きたる折柄、何れも眞人の勸

告に從ひ、二十年の豫定を切り上げて、同行歸朝の事に決めぬ、要は歳月の長きにあらず、學問修業の功成るにあり、二十年に學ぶべき道を、一年二年にて研究し得れば事足る、他が十數年を費したる事業を、二年三年にて成就し得れば、生きての本意此上なく、死しての名譽際涯無からん、とは眞人が空海逸勢の卒業速かなりしを賞贊せる挨拶なりき

留學生歸國の願文は、此の事決定せし翌日をもて、眞人より唐の官廳へさし出され、續いて空海逸勢より、各自に請暇の表を上りき

憲宗帝も空海等の心を憐みて、速かに歸國すべき旨を聽許したまひぬ、陽春三月花の咲く頃となれば、彼等は長安の都を後に、懐しき歸國の途に就くべきなり、千里涯なき大海に船を泛べて、白帆遠く東方に向ふべきなり

此事忽ち緇徒學者の間に聞こえれば、日頃空海の學問文章に敬服する者、空海を友とし善き者、空海の才能に歸依する者、我も〳〵と送別の詩を送り來りぬ、中には學者あり、官人あり、沙門あり、貢進士あり、空海も又た留別の詩を賦して、

離合の情を悉したり

（二）

三月出發の豫定なりし遣唐使一行は、止み難き事情ありて、當分延期の事に定まりぬ、日夜に修業、日夜に研究、二十年の事業を二年の間に爲し遂げんと覺悟し、又た必ず成し遂ぐべき偉大なる精力と熱烈なる自信とを持てる空海は、一瞬の間も空しくせず、或時は經を寫し、或る時は畫圖を摸し、又た或る時は名刹高僧を尋ねて、未だ究めざるの道を究め、未だ知らざるの學を知らんと志しぬ

然も、出發の期は迫る、五車にも餘る經藏圖繪を謄寫すべき手腕は持たず、さりとて目前に見つる名敎を殘し歸らんも最惜しければ、四月上旬逸勢とも相談して、廣く内外に書籍を求むべく、書を當時の大才たる越州の節度使中丞大都督に與へき

空海在唐中の苦勞を見るべし

その文の大意に曰く、日本國求法の沙門空海啓す、今長安城中に於て經論疏等凡そ三百餘軸、及び大悲胎藏金剛界等大曼荼羅尊容を寫し得たれど、力竭き、財涸

る、殊に人劣り、敎へ廣くして、未だ一毫を拔かず、衣鉢又た盡きて、人を雇ふ能はず、食寢を忘れて、書寫に勞するも、日車返し難く、忽ち出發の期に迫る、心の憂へ、誰に向ひて紛を解かん、伏して願はくば、彼の遺命を願み、此の遠涉を愍み、三敎の中、經律、論疏、傳記、乃至は詩賦、碑銘、卜醫、五明攝する所の敎、以て蒙を發き物を濟ふべき物あらば、多少に拘はらず遠方に流傳したく思ふ、渴法の願ひに堪ねず、敢て丹欵を竭して、輕々しく威嚴を瀆す、流汗戰越、謹んで啓し奉る

空海が本朝に文學技藝その他を傳ふべし、いかに努力し、苦勞し、貢献したるかはこの表の大意を見ても推察せらる

當時日本の文物は、範を唐土に取らざる無く、源を長安に發せざるは稀なりき、年々に遣唐の使を派し、學問の僧俗を出すも、偏に彼の文學宗敎美術の精華を輸入して、世界に優れたる我國の山川草木に、意味深く彩色を施さんと願へるに外ならざりき、然も、空海は我國朝野の欲望を滿たすについて、我國の文物に永久盡きる時なき大光明を付與するについて、有らゆる勉强と、有らゆる精力と、有らゆる

苦勞とを注集しき

越州に遊びて、會稽の華嚴和尙神秀に遇ひ、華嚴章疏二部、金師子章幷びに緣起六相圓融義一卷を得たるは此時なりき

又た長安城內の名刹醴泉寺に遊びて、般若三藏を叩き、牟尼室利三藏に見ゑ、南天波羅門の說を聞きたるも此の前後なりしならん

般若三藏の許にては、密經所依の敎典として後世に光明ある理趣六波羅密多經幷びに貝葉の梵篋三口を得き、理趣六波羅密多經は、もと胡語にて書かれたるを、般若三藏の法友景淨の手に新譯せられたるものなりき、景淨は大秦景敎の傳燈にして、一宗の綱統たり、般若三藏は南天竺龍智菩薩の弟子にして、瑜伽の大敎を學び得たるもの、空海が梵字梵音を研究して、從來の學問以外、更に新生面を開き居たるは、全く般若三藏及び牟尼室利三藏の賜物なりき

般若三藏等より得たるは、大乘趣理六波羅密多經一部十卷の外に、新譯華嚴經一部四十卷、守護國界主陀羅尼經一部十卷、造塔延命功德經一卷等なりき、此等の經

文が空海の手に由りて本朝に渡來したる後、佛敎界、文學界、精神界に多大の貢獻を爲したるは、こゝに改め云ふまで無し

（三）

空海が、憲宗帝の宮中に入りて、五筆和尙の譽を博したるも此の當時なりき

空海が能筆の名を知られたるは、今年正月十六日、自ら選みたる惠果大阿闍梨の碑文を書したる時よりなりき、日本の求法僧空海は、その文章に於て本土の大家を凌ぐべき技倆を持ち居れるのみならず、筆跡に於ても又た古の名家に匹敵する天才ありとの評宮中にても隱れなかりき、されば憲宗帝は惠果阿闍梨の碑文を拓本にして、お手許へ召されたりとの噂も聞こゆ、城內の書家學者、何れも目を側めて驚嘆せぬはあらざりき

唐の宮中にても、皇帝の御座所近き殿內に、晉の右將軍王義之の筆跡を留めたる三間の壁ありき、然も歲月久しきに亘りて、殊の外破損したりしかば、この中の二間を修理したる爲め、王右軍の筆跡剝げ落ちて、僅に痕跡を殘せるのみとなりぬ、

されど名にし負ふ義之の跡なれば、誰とて筆を下す人もなく、物足らぬながら其儘になり居たるを、憲宗帝如何思召しけん

『日本の學問僧に書かせよ』と勅りたまひぬ

侍從の面々畏まりて、その事を掛りの官吏に傳へたりき、唐朝に筆道の者無きにあらず、現下に名を成せる能筆の者多きを、特に小國の學僧に大命を下したまふこと其意を得ずと、一たんは驚きもし、又た一たんは異みもしたれど、倫言に背く要なければ、やがて空海を召して、世に有難き勅を傳へたり

空海は海外差遣の貧僧に、斯る大命を下さるさへ恐れ多きに、古今の名筆王義之の遺跡を穢さんこと、罪深き術とこそ存ずれ、偏に宥免を垂れたまへ、と再三再四固辭したれど、皇帝の內勅は火よりも明かなり、容さるべき筈も無く『是非に〳〵』と云はるゝまゝ、遂に謹んで御受けしき、これ眞に空海一人の譽れのみならず、長安に滯在し、留學せる日本使臣及び日本學生一同の名譽、併せて唐土人が小國と侮り輕んずる日本國にも、大唐天子の勅を奉じて、王義之の筆跡を接ぐべき能書家

あるを知らする一となき好機會なりき

空海は尙熟に思考して、改め御答へ申し上ぐべき旨を答へ置き、やがて宮闕を辭して、急ぎ眞人一行の官宅を問ひたりき、折から橘逸勢も來合せぬ、眞人に同行せる人々も會しぬ、空海は法衣の袖を搔き合せながら座について

『一大事起り申した、六書八法の心得だも十分に無き空海へ勅下つて、王羲之の筆跡を補ふべき旨仰せ出された、及びも無き事、再三御辭退申し上げたれど、毫御聽許の氣色おはさぬ、大命を拜して御座所近き御殿の壁に、古今能筆の跡を接ぐこと、身に餘る光榮とはあれど、眼のみ高くて伎低き身の甲斐なさは、却て異域の宮中に耻辱を殘すことあるまじきか、空海一人は、王羲之の激怒に觸れて、筆持つ手假し寸々に碎けても、術の拙きを悔みて止まん、されど日本の面目を穢すことありては、八百萬神の御靈威に對して恐れあり、且は針の尖頭のその尖頭ほども、御國の稜威を傷けては、空海幾世を替ゆるとも、滅ぶる時なき罪を得ん、まことに一期の大事と存ずる、諸公の思召し、何う在さう』

騷ぎたる氣色は無けれど、降つて生いたる如き大事に臨んで、多少の迷惑を感じたる樣見ゑぬ、逸勢は一議に及ばず笑を見せて

『貴僧一代の譽れぢや、これまで渡來せる日本學僧數多くあれど、大唐天子の御見出に預りて、宮中に筆跡を殘したるものあるを聞かぬ、貴僧の譽れは日本の譽れぢや、殊に貴僧の能筆は、洛中洛外の學者名僧悉く存じ居る、辭することかは、臆する事かは、筆端に諸天善神罩らせられる、一瀉千里の筆力をもて、日本學僧空海の筆の跡を、大唐の宮中に殘し置くも一興ぢや、お受け召され』と事も無げに云ひたりき

『されど喃、場所は九重の雲の上、書は王右軍の跡といふで……』

空海は尙躊躇の色ありき

『さりとて勅は出でゝ還らぬ、』と眞人は重々しき語調を張りて「沙門の頭には天照大神御宿らせぢや、天神地祇御付き添はせぢや、一期の晴れ、望みて得られまじき事、すぐお受けせ、折柄我等もこれへ來合せ、好い家苞を得て歸る』

『伊勢大神宮、御加護あらうか』

『中々の事、無くてあらうか、神威必ず毫端を助けさせられる』

逸勢は力付けるやうに云ひぬ

『さらば日本一百八十七社の神々を頭に戴き、大毘盧舍那如來を胸に宿して、一心に筆を着け申さう』

空海の白くふくやかなる面上には、美しき覺悟の色、淡紅に浮んで、曉近き東の空に山櫻匂ふが如く見ねき

『幸前を祝ひの盃、これに本國から齎せた神酒の殘餘がある』

眞人は手づから瓶子を取りぬ、白玉の觴は侍者の手して空海の前に置かれぬ

『神酒とある、神酒とある、只一滴……』

『おゝ』と眞人は沙門に酒を侑むる事の道にあらざりしを心付きつゝ『只その香を……神々しいその香を喃』

空海は謹んで觴を戴きぬ、只一滴の神酒の香りは、忽ち胸に滲み入りぬ

『御名譽を祝ひ申す、その一字一劃に、大日本國の魂を示させられ』

逸勢は朗かに且つ大きなる聲にて云ひぬ

空海は悠然として去りぬ、一座の者が口々に祝儀する溫き口上を背後より浴びつゝ、多くの期待と、深き光榮とを胸に持ちて、悠然と退去しぬ

夫より宮闕へ出て、謹んで御受け申し上ぐべき心構ねなりき

（四）

やがて譽れある揮毫の日は來りぬ、空海は總の用意を調へて參内す

廣き唐土の中にても其の人無く、文物伎藝の中心として、書家畫工雲の如く集まれる長安の城内にも其の人無く、久しき間、筆を着くる者無くて、其儘に打捨てありし王羲之の筆の跡を、人も有らうに日本の學問僧、大帝の勅を奉じて、今日揮毫するよしの噂、宮中に隱れ無く知れ渡りたれば、名譽ある能筆家の書き樣を見物せんとて、御殿の廊下より庭苑へ掛け、集りつどゐたる者幾百人といふ數を知らず

中には書をもて祿を食む者もあり、書をもて將來立身の基礎を作らんと心掛くる者

もあり、大官、有司、學者、文人、倚羅星の如く來集す、空海にしては一期に二度とあるまじき晴の場なり、普通の者ならましかば、その物々しき光景に打たれ、その數多き人の香に醉ひ、未だ筆を着けぬ間に、心臓破れて卒倒もすべきなれど、空海の頭には、果して伊勢大神宮添はせられぬ、果して大比盧舍那如來宿らせられぬ、顔の色だも變ぜず徐々歩みて、壁の前に身を進めぬ

玉座かと思はるゝ處には、水晶の簾深く下りて、得ならぬ香の薫り、脉々と漏れ出づる、見物の大官有司、簷の内外に溢れたるか、何れも鳴を鎮めて見る

折柄初夏、青葉吹く風そよ〳〵と衣袂の間を過ぎて、御苑の牡丹清き香を送り來る、空海は口に眞言を唱へ、心に日本の大小神祇を持念しながら、擦りたる墨を含ませて、まづ最初の一劃に筆を着けぬ、淋漓たる墨の色、宛ら秋月の輝く如く輝きて、見る者の目も眩く、強き時は、怒れる猊の石を抉るが如く、遠なる時は、渇きたる驥の泉に奔るか如く、軸動いては星辰轉じ、筆停まりては風雨餘る、いかさまにも神佛筆の端に宿りて、思ふまゝに字を作らせたまふかと疑はれぬ

殊にその筆勢の逸きこと、例へば雲の奔るが如く、風雨の過ぎる如くなれば、夢中になりて見物する人々の目には、口と左右の手と、左右の足とに筆を把りて、五筆同時に動くが如く不思議にや見ねけん

『阿、阿、阿』と時々憫れたる如き聲を漏らして、醉へるやうに見物しぬ

最後に書きたる『樹』の一字は、筆勢殊に優れて、壁一面燦として珠璣の光るが如くなりき、見る人の目には、大鉢に漾へたる墨をそのまゝ壁にそゝぎたるが、自然に字を作したりとも見ねけん、手に持つ筆自らに動きて、見る〳〵間に書かれたりとも映じけん、滿座の人々、感嘆の聲を發せぬはあらざりき

憲宗皇帝は御感斜めならず、五筆和尚と號くべき旨勅あり、空海面目さながら四邊を拂つて見ねき

（五）

五筆和尚の名を得たる後なりき、涼風御講の柳を吹いて、蓮華香り好く薫する曉、空海は只獨り城内の河の邊を逍遙して、朝露の清きを踏み居たるに、青草繁る

堤の上に、蓬の髪亂れて肩にかゝり、藤の衣破れて、膝もあらはに穢しき童子佇み居たるが、つか〳〵と前に來りて、空海の袖を引くやうに

『和尙へ申す、日本の五筆上人は此方か』と問ひ掛けぬ

空海は何氣無く『おゝ』と答へて、そのまゝに行き過ぎんとするを、童子は又た引き止めて

『五筆上人、よく書かせられる氣、眞ならば此の流るゝ水の上に、文字を現はしたまふことならうかな』と再び問ひぬ

『どう有らう、愚僧まだ水面に文字書いた覺にござらぬ、なれど文字は心の綾、一劃一點に魂單むれば、水の面にも墨の色現はれぬことあるまい、試し見やうか』

空海は心に深く信する處あるが如く云ひぬ

『いで、試みさせ、これに墨池を持つて居るに……』

童子は手にせる筆墨を取りて、空海の前に出しぬ、空海は興ある事に思ひつゝ、

流るゝ水の上に對ひて、清水を讃する一句を書くに、文點亂れず字々具に現はれて流れのまに〳〵隨ひ下る、宛ら黑牡丹の葩散りて、一片々々流れ行くに彷彿たりき

『おゝ、おゝ、おゝ』

童子は手を拍ちて、感嘆の聲を揚げ居たるが、やがて空海の手より筆を取りて

『わしも爲う、上人の爲された通りを爲う、御覽せ、いで』

童字は水の上に『龍』といふ字を書きぬ、筆力雄健銀鈎を轉ばす如く巧みなれば空海常人なるまじく見てあるに、墨色鮮かに現はれて、然も空海の書きたる文字の如く、水に從ひて流れ去る氣色無く、同じ處に漾ひありき、空海いよ〳〵驚きて近づき見るに、龍字の右の小點打たでありき、童子の忘れて書き落したるか一點足らざりき、由て袖を引きて

『何とて此の點を打たせられぬ、何とて此の點を落したまへる、これにては龍字の劃に外れては居申さぬか』と心注けぬ

童子は莞爾と打ち笑みて

『まことに一點打たである、されど此の點を打つ時は、眞實の龍となる、登門の龍となる、心して御覽せ』

云ひながら筆を落す、一點の墨氣水の上に浮ぶと見る間に、水上忽ち雲起り、虚空急に雷のはためく響きして、童子の書きたる龍の字に、見る〳〵九色の光り現はれ、見る〳〵五采の鱗見ゐて、空中遙に奔騰す、さすがの空海も目前に此の不思議を見て、詞も無く立ち居れる時

『われは是れ文珠なり』

朗かに神々しき聲して云ひて、童子の姿は簇る雲の中に消ゐ失せぬ、亂れたる髪は光明にして、藤の衣と見ゐたるは瓔珞なりき

大聖文珠、假に姿を現はして、空海の筆力を試し見たるなりき

空海の筆蹟は、皇帝と人民とに認められたるのみならず、大聖菩薩にも認められぬ、眞淵僧正褒美して『啄鷄奔獸の畫獨り九州に留まり、湧雲廻水の點盛んに八紘

に變ず』と諸ひたるも、その故無しとぞ知られし

（六）

斯くて八月いよ〳〵歸國と定まりたるを、憲宗皇帝聞し召されて、親く拜謁を賜はらんとの御沙汰下りぬ、空海は心に天恩の渥きを感じつゝ、眞人の聽許を受けて參內し、進みて天顏に咫尺したりき、皇帝は空海を玉座近くへ召したまひて

『惜しや、歸國すといふ、暫く本土に留まる心なきか、朕長く師として仕ゆべきに……』と宣はせぬ、空海は謹んで

『勅宣辱く存じ奉る、なれど身を忘れ、命を輕んじて、遠く三千里の波濤を凌ぎ來る事、偏に御佛の法を傳へて、日本の衆生を度せんが爲めにおはせば、假し聖天子のお側近く奉仕して、一代の譽れを得るとも、空海の本願にはおはしまさぬ、伏して願はくば、此のまゝ永く御暇を給はり候へ』と臆したる氣色も無く言上しぬ

憲宗皇帝は深く空海の心の底を御推量あらせられぬ、唐帝の國師として、無際限

の信仰を繋ぎ得、錦綉の衣に包まれ、七寶の床に坐する光榮を受くるとも、本土生國の大恩を忘れて、佛法弘通の願望を忘るゝ空海にはあらじ、懋ひ引き止めて、此の聖僧に物を思はせんより、一日も早く還し遣りて、唐土の文物、別しては密敎の眞髓を東方に弘通させんこそ、此上も無き功德ならんと思召されたれば、龍顏殊に麗はしく

『仁の云ふ所理に適へり、さらば强ては引き止めじ、朕が年已に半を過ぎたり、願はくば一期の後、佛會に逢はん、これは來緣を契るの印ぞ』と宣はせて、御手から菩提實の數珠を賜はりぬ

空海は恭々しく御受けして、御返答申し上ぐべき詞も無く只管感涙に咽び居たりき

『忘るゝ勿、長く忘るゝ勿、仁本國に歸るの後は、此の念珠をもて朕と思へ、一百八顆の珠の一つ〳〵に、朕が心は籠りてあるに……』

大德廣智の唐僧にても、斯ほどまで渥き勅宣を蒙る者はよもあらじ、空海は一介

の求法僧、然も小國の沙門なり、親しく天顏を拜するさへ畏きに、貴重なる御物に優渥なる御言葉を添へ賜はる、世に此ほどの幸福あるべきか、世に此ほどの光榮あるべきか

恩賜の念數を兩手に捧げて、心限り大恩を報謝する時、紅涙轉た襟を濕して、紫雲身を包むが如く感じき

空海の入唐中に於ける不思議の事は、一々數へるに遑あらじ、或は虛空に犬を飛ばし、或は目に見ねぬ鬼を使ひ、或は鳥を留めて巢を落すの術、具に記さば際限なからん、されど天竺靈鷲山に登りて、釋迦如來を拜見せる一事は、長く記錄に留むべき靈驗なり

八月歸朝の期迫りたる折柄なりき、ある日の夕暮れ、麗はしき神童一人現はれて空海の前に進み

『日本の沙門、疾く靈山へ行かせませ、我等案內仕る』と云ひぬ

空海は、此の童の何者なるかを問ひ究むる隙も無く、靈山へ案內すといふ詞嬉し

さに、驀然と立ち上る時、一頭の白馬、美しき鞍置いて前み來りぬ、神童は指して

『釋尊よりの御迎ひぢや、いざ召させませ』と指し云ふ

空海はひらりと乘る、その瞬間、一むらの紫雲棚引き降りて、空海を包むよと見ねたるが、馬の疾き事禽の如く、咄嗟の間に千里を驅けて、忽ち流沙の境に至りぬ

空海は夢に夢を見たる如く、今まで乘り來れる白馬に翼やあると撫で試むるに、そのまゝ姿は掻き消されて、人間界には覺ねも無き清々しき初秋の風、天空より落し來りて、空海の心に掛る細き塵を吹き拂ふ、その風一たび吹き去りて、空海の心水の如く澄み、空海の躰軀最輕く覺ねぬ、此時、一頭の青き羊穀束として出で來り、空海の前に脊をさし付けて『疾く乘れ』と勸むる如し、空海は又た夢の如く乘る

青き羊は、白き馬の足よりも疾かりき、忽ちの間に流沙を過ぎて、只ある山の麓に着くに、天風此の邊にそよ〳〵と吹きて、快きこと云ふばかり無し、羊の脊より降りて、忙然と佇む時、異形の夜叉神遠くより飛車を引き來りて、空海を扶け乘せぬ、空海はその乘心地好き飛車の上に座して、白き雲、碧き空、紅き花園の間を通

り、やがて靈山に到着しぬ

靈山は水晶もて作り成せしか如き玲瓏たる峻嶺なりき、美はしき音樂、綠樹の間に聞こゆ、淡紅き蓮華の葩、雨の如く虛空より飜へりつゝ、縷々と立ち昇る香の烟、紫の霞と現じて、清淨の氣天地を掩ふ、只見れば、釋迦牟尼佛儼然として正面に坐をしめ給ひ、左に觀世音菩薩、右に虛空藏菩薩在して、八萬の大士、萬二千の聲聞、各々前後に集會あり、一時に此方を見詰め給ふ

空海は有難さ、貴さ、辱けなさに心を打たれて、思はずも跪き合掌す、此の時釋尊は珠玉と珠玉とを撲つ如き清しき聲を張り上げて

『日本の沙門よくぞ來れる、汝昔德本を殖ねたる功德あり、今又た我が內證秘密弘利衆生に値ふ、須く後佛の出世を傳へよ』と宣はせぬ

空海は長く跪いて一心に掌を合せぬ、蓮華點々と頭を撲ちて、異香四方より薰じ來る

『近う、近う』

繹尊は徐に宣ふ、空海は合掌したるまゝ身を進めぬ
而して貴き敎勅を受けぬ、而して有難き佛意を授けられぬ、心に鐵塔の門を開き
て、金薩の印明を受けぬ
斯くして空海は秘法中の秘法を得、殊勝中の殊勝を授かり、幾度も佛如來を拜し
つゝ退げば、飛車前の如く來り、青羊初めの如く來り、白馬再び姿を現はして、紫
雲の中を奔ること風の如く、七日七夜に千萬里を駈けて、再び長安の城中に歸りぬ
斯る神驗屢次あり、佛菩薩心ありて、空海の身と心とを、世界に二顆となき名玉
に磨き上げんと爲たまふなり

御遺告　其十三

此の池に龍王あり善如と名く、元是れ無熱達池の龍王の類なり、慈ありて人の爲に害心を至さず、何を以て之を知る、御修法の比、人に託して之を示す、即ち眞言の奧旨を敬つて、池中より姿を現ずるの時、悉地成就す……

第十七章　歸朝

（一）

八月歸朝の途に上る
長安の秋は悲愁限りなかりき、明州に至るの間、白雲紅葉山々野面を彩りて、長
程短亭別恨に鎖れぬも無く、白馬銀鞍離情の切なるに伴はぬもあらざりき
されど道中恙がなく、日數を經て明州の海岸に到着す、遣唐使高階眞人、橘逸勢
等一行と同道なり
岸には秋柳參差として繁り、繁りたる柳の下に、懷しき日本船纜を繫ぎてあり
水夫楫取は大使の一行を待ち難ね居たる如く、湊へ出で歡び迎へぬ
空海は滿二年の間聞かざりし故郷人の土語を聞き、滿二年の間見ざりし故郷人の
むくつけき姿を見、父母の鄕に歸りたる心地して、一々手を取るばかり慇懃に挨拶
しぬ、船頭水夫は
「此が音に聞いた空海樣ぞや、此の前のお渡海に、あはや船も覆へるよう見にた

る時、一念の信力もて、山見るやうな大波を鎮めたまふた空海様ぢや、此の活佛様を乘せて歸るは、我等一期の面目ぢや、後々成佛の緣ともならん」と口々に云ひ囃しぬ

空海の盛名は、此の時已に本國の津々浦々に聞こゑ居たりき

（二）

「風可し、波好し、潮好し、早や召せ、今日の間に、沖合まで漕ぎ出で申さうに」船頭は物珍らしく陸に出て、四邊の風色に目を遣る一行を手招きしぬ、眞人を始め、空海も、逸勢も、裾の邊りに、磯邊の秋の色を滲ませて、徐に此方へ歩を運ぶ

空海の手には、惠果大和尙より讓られたる龍猛菩薩傳來の三枯杵を持ちてありき

日は早や落ちんとす、空海は岸邊に立ちて、遙かに東方を凝視し居たるが、これぞ確に日本と思はるゝあたり、紫の雲棚引きて、夕陽差明く映り居たり、空海は心に眞言を誦しながら、儼然と岸邊に立ちて

「諸天諸菩薩、われは今日本に向ひて、この相傳の三鈷を投げ申す、我習ふ所の

秘密の聖敎、果して流布相應の土地あらば、此の三鈷を留めて、その處を知らせたまへ」

一心に念じつゝ、手にせる三鈷杵を投げたるに、三鈷の鍍金きら〳〵と輝きて、さながら羽翼の生へたるが如く高く飛び行き、忽ち雲の中に形を潛しぬ、此の奇異の有樣を目前に見たる人々は、三鈷の行方と、空海の面とを比べ詠めて「ありや〳〵」と驚き云ふのみ

（三）

船は明州の岸を離れぬ、仲秋の月魄は銀盤を懸けたる如く大空にきらめきて、海波遠く連る處、滿月幾千萬の珠と碎け、秋潮白き鱗を疊みて、蛟龍船を導くかと賴母しかりき

波穩かなれば、船中は面白く笑ひ興じ、風好ければ、白帆に人々の歸心を孕みて千里の波濤を破り行く、中には酒を呼ぶもあり、詩歌風流を樂むもあり、雜談に時を移すもありしが、空海は一間に不動明王を安置して、日夜の加持を怠らざりき

此の不動明王は、空海が惠果和尚の膝下にありたる時、和尚の注意に由りて、刻限を移さず、一刀三禮自ら彫刻せる尊像なりき、和尚は空海歸航の途上に於て、九死一生の大難襲ひ來るべきを察し、空海に不動明王を彫ませ、おのれ開眼して、船中の守護佛と定めたるなり

されば空海は、厚く信心して、片時も祈念を休まず、一には海上の安穩を祈り、又た一には惠果和尚の德を懷びぬ

斯くて海上に在ること十數日、或る夜月未だ出でず、星疎に風死して、秋も早や季近くなりしといふに、霄の程より蒸暑きこと云ふばかり無かりしが、やゝ戌刻かと思ふ頃、一陣の風吹き落すと見る間もなく、一天墨を流すが如く暗くなりて、海の底に撞々と物凄き響き湧き、雲の間に稲光間なくひらめきて、波忽ち山の如く高く、濤更に谷の如く低く、船はその間に漂蕩ひて、今にも千尋の海底に吸ひ込まんとす

されば一行の人々死したる如くなりし、波の動くたびに彼方へ轉び、船の漾ふごとに此方へ顛びして、僅に佛の御名を唱うるに過ぎざりき、眞人も船底に平伏して、運を天に任すが如く見ゐたれば、その他の供人もおなじやうになりて、蒼ざめたる顏と、亂れたる髮とを、稻妻の光りに照らさるゝのみ、船中は今にも絶ゆべき唸り聲と、今にも地獄へ落ち行くべき叫喚とが、入り亂れて憐れに聞こゆ

此の間も、平生に異ることなく、泰然として明王の前に兀座せるは空海なり、その背後に端座して、同じやうに勤念の眼を閉げるは逸勢なり、胡摩の烟、濛々として立ち騰る

空海は目を閉ぢ口を噤みて、心のみをくわつと開きぬ、靜に爪繰る珠數の珠に、念々撓み無き熱血を籠めて

「われ遠く波を超ゐて、唐土に法を修し、學を問ふは、恙なく本國へ歸りて、諸天の威光功德を增益し、國界を擁護し、衆生を利濟せんが爲めなり、且は請來の經典、圖畫、道具皆な收めてこの船底にあり、諸天善神願はくば冥護を垂れたまへ、而して恙なく本土へ着かしめたまへ、さあらば一禪院を建立して、法に依り修行せ

ん」　膏汗を流すまでに祈念しぬ

逸勢は斯くとも知らず袖を引きて

「何んと、入唐の時が思ひ出さるゝ喃、彼の時の大暴風も、此のやうに激しうあつた、それに又た歸りの海も……」

當時の恐しさを思ひ出して、戰慄を止め得ぬが如くに云ひぬ

空海は寂寞として答へせざりき

「彼の時は、貴僧の丹誠で、一百八十七社の神々を祈らせられた、その驗立ち所に見ねて、さしもの風波も鎭まり、大使副使は云ふまで無し、數ならぬ我等まで、危い命を拾ひ申した、その時の暴に比べて、今夜の暴は一層ぢや、御利益の驗を見る手術ござらぬか、諸天善神のお袖に縋つて、船中幾多の命助くる道ござらぬか」

逸勢は同情の籠る聲にて云ふ・黑き潮舩を撲つて、澎湃たる濤聲、百雷の一時に轟くが如く鳴りはためく

「利驗は今ぢや、青龍寺大和尙の誓願、今明王の尊像に現じ申す」

空海の重々しく力ある聲、船の胴の隅々隈々に聞こゑ渡る時、明王の履ませたまふ猛火烈々と燃ゑ立ちて、生けるが如き焰白く紅く揚る時、御手に持たせられたる御劍縱橫に動きて、恣に浪を切り從へ給ひぬ、時には御手を脫げ出でゝ、怒濤猛り海上に躍りつゝ、赫灼たる光輝の下に、荒立つ波を伐るかと見ねき

此の驗果して見ねて、明王の御劍閃めき渡る處、高き波次第に低く、猛き波次第に鎭まりて、見る〳〵中に風も和ぎぬ、見る〳〵中に雨も收まりぬ、今の今まで墨を流したる雲晴れて、瑠璃一碧拭ふやうなる大空に、星の瞬きするさへ見ねぬ、逸勢は舩に手をかけて、沈と此の樣を見詰め居たるが

『不可思議、不可思議、驗は降つた、明王の威力に因て、波も、風も鎭まつた』

嬉しげに雀躍して、同じ事を三四度も繰り返しぬ

空海は契印を結びたるまゝ、明王の前に座り居たるが、逸勢の斯く叫び立つるを聞きて、徐に眼を開き見たるに、船は平地に在るが如く些の動搖も無く、胡摩の烟、淡く白く舞ひ揚りて、御劍は元の御手にあり、御劍は原の御手に還りて、尖頭

より滴り落つる露、宛ら水を掛けたる如くなりき

空海は有難さ身に滲みて、一心に勤念す、逸勢の呼ぶ聲に驚きて、明王の前に轉び入りたる眞人も、その供人も、逸勢諸共、尊像の前に平伏して、暫くは顏をだも擡げざりき、これ波切不動の由來なり

（四）

『禁廷樣お崩れなされた、悲しや、禁廷樣お崩れなされた』

渺茫たる海中、誰人が云ひ出せしともなく、水夫掛取此の忌々しき言を云ひ罵りて、深く憂に沈めるが如くなりき

眞人は驚き異み且つ恐れて、船頭を側近く招き、忘れても口にすまじき事を、如何なれば斯くは云ひ觸らすぞ、聖壽の萬々歲を祈るこそ、臣民たる者の當然なるべきに、禁廷の御不祥、萬民の悲嘆となるべき事を、好みて噂する法やある、自体誰が云ひ出して、船中の取沙汰とは爲りつる、最初の者を探り出せ、第一番に畏れ多き事共云ひ出しつる魯愚兒を調べ上けよ、と云ひ渡しぬ

船頭は只管に恐れ惑ひて、多くの水夫掛取を寄せ集め、その忌はしき風評の出所を詮議したれど、皆が後難を恐るゝに因て、口を開く者あらざりき

『誰が云ひ出したとも分りませぬ、天のお聲と思ふ外ございませぬ』

皆が最後の返答は此なりき

空海は此の事を聞くと共に、心にそれと覺悟する處ありき、願ふまじき事にてはあれど、船中のものの外人の往來あるにはあらず、八重の汐路に舟を遣れば、目に遮ぎるは朝霧暮雲、耳に聞くは濤聲鳥語、その鳥すらも通はぬ處あるに、誰が傳へて彼の忌はしき取沙汰は云ひ出しけん、これ恐らくば神佛御心ありて、聲なきに告げ知らせ給ひたる大事ならん、日本に生を受けたる者が、一天萬乘の大君登遐あらせられたるを、毫も知らで日を送る甲斐なさを憐んで、それとなく告げさせたまひたる御聲ならん

謹慎無くては恊はじ、心に喪を付けでは恊はじ、諸天善神に誓願して、冥福を祈り奉らでは恊はじ

空海は潔齋して一間に籠りぬ、波風靜かに帆を送りて、船は九州灘に近づく

（五）

空海等一行を乘せたる船は、その年十月二十二日、恙く筑前博多に着きぬ

大使の乘船歸着の由、早くも大宰府に聞こゆれば、少貳從五位下田中八月麿輪子をもて迎ゐぬ、その時、空海第一の問は

『龍顏麗しく在らせ給ふか』との言なりき、八月麻呂は忽ち深愁を面に浮べて

『大使も、沙門も、異域に在しましたれば、知りたまふ所なきも理なり、まことに天日も昏く、野山も曇りて、蛋も、漁夫も、諒闇の悲みに泣かぬぞ無き、先帝は今年三月十七日神上りに上らせたまひて、桓武天皇と諡し奉る、されば皇太子安殿親王天津日嗣を繼ぎたまひて、五月十八日卽位の大典を擧げさせられ、此の日改元ありて、大同元年と仰せ出さる、沙門が箱崎の八幡宮に、海路安穩を祈らせられたは、一昨年の六月上旬なりき、海の景色、野山の樣、只一本の松の翠も、當時の姿に變りたるはなければ、御代のみは變らせられた、申すも便なき事候ふ』と鼻

を詰らせながら語りぬ

果して我が推量に異はざりき、果して水夫の口を藉りて、神佛大事を告げさせられき、まことに太宰府の役人衆悲み語るが如く、山河草木一昨年出發の時に異りなくて、只年號の異りたるに遭ひ奉ること悲しけれ、今は入京の望みも絶ねぬ、高階眞人の一行に加はりて、一日も早く闕下に伏し、唐土修法の大略を復命し奉らんと思ひたる望みも絶ねぬ、止むを得ずば、請來經の目錄を製り、上表の文を草して、高階卿に托し、新御所に奉進して、勅准を得奉る外はあらじ

空海は斯く覺悟して、太宰府に滯在する間、まづ上表文を認め終り、更に請來經典等の目錄を作製しぬ、世に云ふ御請來の御文は是なり

眞人及び逸勢は、空海に別れを告げて、博多の津より便船しぬ、立花山の木枯愁思を吹き、箱崎の松原別恨繁く、白帆豆の如く遠き海に見ゐて、離情雲の如く此方の岸に簇がる、眞人が都へ齎す第一の土產は、空海より托せられる上表文にて、空海の胸に殘れるは、いかにして窰敎を東漸せしむべきかの苦勞なりき

空海が博多へ着きて後、暫時の旅館に當て、上表文等を起草せしは、勤行寺として海邊の小庵なりき、蕭然たる竹垣四邊を繞らし、朝の雲、夕の雨、濤聲軒に近く萩葉扉を打ちて、世にも閑寂なる境、磬を叩けば小禽之に和し、經を彌すれば雲來りて窓を窺ふ、堂は破れたれど法燈明く、厨裡は荒れたれど、酒肉絶にて、靈氣自らに罩る、小僧の給仕に出でたるを促へ『此の寺の由緒を知れりや』と問ひたるに小僧は直に

『唐土の沙門が借の宿とせし處ぞ』と答へぬ

これ實に天來の聲なりき、空海はその聲肝の底に響きて、不思議に舊き記憶を呼びぬ、曾て一讀せる鴻臚館の記錄に、大唐より渡來せる梵僧、此の津に便船を待つ間、海邊に一宇の家を借りたりとあるは、此の小庵の事ならん、梵僧は善無畏三藏なり、われ曾て久米寺東院の塔の下に善無畏の埋め置ける名經を得て、遂に渡唐の願ひを發し、大志漸く成りて國に歸るの時、善無畏休足の庵に宿るも、返す〳〵不思議の緣とこそあれ、いでわれこゝに伽藍を建立して、密敎最初の道場とせん、こ

れ一には善無畏の舊蹤を保つ爲め、一には今日の由緣を記念する爲め、密敎弘通の曙の光り、西の方筑紫に見ねて、次第に東へ及び行かば、諸天の擁護なき事あらじ

空海は斯く覺悟しつゝも、一宇の伽藍を建立するは容易ならねば、深き望みを心に有ちて、時の來るを待ちたりき

此の小庵に逗留する間、瓢然と杖を引きて、三日五日十日程づゝ、九州中國の名山を跋渉し、一つは法を修し、一は父母の福運を祈りたり、肥前には黑髮山の舊蹤あり、冬晴れ麗しき日に遊びて、こゝに等身の像を描きたる昨日を偲び、更に槎を山陽の海に泛べて、嚴島の靈地を問ひ、彌山の頂に攀ぢて、求聞持の法を修す、海波脚下に白く、淡雲念數の上に棚引きて、曉には明星の光りに親み、夕には蛟龍の影を偲ぶ、斯くてある事數日、行果てゝ山を下らんとする時、圖見れば小堂の佛像に小さき柏木を供へたるがありき、空海は何心なく採りて、堂の側に突き指しぬ

然も空海が一枝一朶の枯れ果てんことを憐む心は、やがて根となり、幹と太りて幾百年の後までも繁茂しきざりき

斯る中に歳暮れて、大同二年の春は來る、されど空海に對する都の沙汰は來らず

御遺告　其十四

彼の現はせる形業は宛ら金色の如くして長さ八寸許の蛇なり、此の金色の蛇、長さ九尺許の蛇の頂に居在せり、此の現形を見る弟子等は、實惠大德、并びに眞濟、眞雅、眞紹、堅惠、眞曉、眞然等なり、諸弟子等敢て覽着け難し、具に言の心を注して、內裏に奏聞す少時の間に勅使和氣眞雄、御幣種々の色の物をもつて、龍王に供養す、眞言道の崇き事爾りしより起れり……

第十八章　密教弘通

（一）

荒れ果てたる庭にも梅咲きて、春は一日ごとに調ひぬ、空海は縁側近く端座して長閑に照る春の日の遲々たるを見てありしに

『物申す、空海殿在しますか』

突然として呼ぶ者ありき、空海は覺にある聲と聞きて、枝折戸の方を振り返れば太宰府の少貳田中八月麻呂、垣の外に立ち居たりき、頬笑みて

『少貳殿まづ此方へ……梅も咲き初めてござり申すに……』

快く請ずれば、少貳は慇懃に會釋して入り來る、眉根に消ゑ難き影さして、袂のさきに憂の色溢れて見ゑぬ

『勤行の妨げとは爲らであつたか、心無くも問ひ申しつる』

八月麻呂は簀子縁へ膝行り上りて、一別以來の挨拶す、去年博多へ着きたる時、雜仕多くを引き具して出迎ねたるは此の人なりき

空海は眞心もて對しぬ

『お願ひあつて參つた、お聞き届け下さるであらうか』

八月麻呂は暫時して後、さも云ひ難さうにして云ひぬ

『何事にても、愚僧身に協ふ用とあれば……』

『沙門ならで協はぬ事、まづ願ひの筋を聞かせ召せ、我等心に堪ね難き嘆き有つて候ふに……』

『御嘆きと喃、理りや、お顔に雲が掛りて見ゆる、肉身にでも離れませしか』

『まことに御推量の通りとある、まことにその嘆き持ちてある、思へば去年の如月中旬、梅の老樹、此の樣に花を着けてあつた、その梅の……懷しくも美はしいその梅の香に包まれて、母の靈魂は還らぬ方へ去らせられた、栂の花のまだ散らぬ間に、母は早くも散らせられた……』

八月麻呂は幾度も目を拭ひたれど、又しても〳〵はふり落つる涙の露、しとゝ直衣の襟を濕す

孝心極めて厚く、念々親の安否をのみ氣遣へる空海は、八月麻呂の悲しげに語る詞を聞きて、一時に胸の薄る心地しぬ、二十年の修法鍛錬、七千日の難行苦行、身と魂とを石と堅め鐵と錬りて、猛火洪水の中にあつても、爪頭一つ動かさじと覺悟しながら、皮一重裡面には紅き血ぞ通ひぬる、父母の恩を思ふごとに、熱涙涸れたる情の泉より湧いて、四十二の骨々戛然と鳴るを感ず

浮世を捨てたる沙門の身すら此の如し、況してこれは凡慮の官人、圖らずも母を喪ひて、追慕の思ひに駈らるゝ事、取り分けて同情するに足る、爲る限り慰め遣らん、他人の母の冥福を吊ふは、やがて我が母の福運を祈るなり

空海は斯く思ひて、心に光明眞言を誦し初めぬ、八月麻呂は袖の頭に涙を拂ひて

『願はくば吾が爲めに、母の冥福を祈りたまはれ、觀世音寺の三綱衆は、筑紫隨一の大德なれど、われは只管沙門を賴み參らするに、此の切々の情を汲んで、偏に供養なさせたまへ、大恩生々忘れ申すまじ』と懇願しぬ

空海は歡びて八月麻呂の頼みを容れぬ、數ならぬ身を頼ませられて、御母儀一周忌の法要を勤めさせられんといふ、善い哉、善い哉、われ願文を認めて御身が切なる心を訴へ、佛像經卷を圖繪奉寫して、供養の實を明かにせん、と快く承引きて後

『而て命日は幾日とある、今日は正月二十五日ぢや』

『早速の御承引、辱く存じ奉る、命日は二月十一日、今より十數日の後候ふ』

『好し、さらばその日までに、萬事の用意を調へ置かん、遲滯なく來らせられ』

空海は清々と美しき返答なりき

八月麻呂は、早く目前に、母の成佛得脫せる姿を見たる如く歡び歸りぬ

空海は直に潔齋して、八月麻呂の爲めに、千手千眼の大悲菩薩幷びに四攝八供養摩訶薩埵等の一十三尊を圖繪し、妙法蓮華經一部八軸、般若心經二軸を奉寫し、別に田少貳が先妣の忌齋を設くるが爲めの願文一首を認め、荒れたる庭を掃き清め、齋の席を設けて待ちぬ

已にその日となりたれば、八月麻呂は一門親族を同道して參詣しぬ、潔く香華を

修し、諸尊諸菩薩を供養す、妄霧忽ち開けて、大日の光り高く、智鏡長へに照りて、實相を示す、亡靈立ち所に佛果を得ん事、疑ひあるまじう見ねたりき

（二）

『法の不思議、之を用ひて究り盡きる時無し、福は現親に延て、壽考光寵ならん、臣子善あれば必ず所尊に奉ず、此の勝福を廻して聖朝に酬ひ奉れば、金輪常に轉じて十善彌よ新ならん、春宮瓊枝宰輔百工、共に忠義を竭し、福履之を綏んせん、五類の提婆、十方の數生、同じく一味の法食に飽いて、等しく一如の宮殿に遊ばん』

これ空海が田少貳の爲めに選みたる願文の結文なり、法筵滯りなく果てし後、八月麻呂は云ふまで無し、一門緣類悉く空海の前に平伏して、今日の大恩謝くる時なきを歡びぬ

『少貳殿、聞かせ召せ、この小庵をこそ善無畏三藏は假の宿となされたれ、まことに大聖の舊跡、佛法歸依の靈場なり、然も愚僧、去年の末よりこゝに宿りて、諸

佛に事へ奉る、返すがへすも不可思議の緣とこそ、願はくば諸方檀那の助けを得て密敎最初の道場を建立せばやと存じ申す、斯る小庵の庭を拂ひて、御母儀の一周忌法要を營み參らせつるも、宿世の緣繫がる故ぞ、一臂の力を貸させたまへ』

空海はこゝに初めて日頃の願望を打ち出し語りぬ、深く空海の德に歸依し、深く空海の菩提心を知る者、この殊勝なる談示を受けたるなれば、八月麻呂は光榮厚き依賴として即座に奉行周旋すべき旨を答へぬ、八月麻呂已に然り、一門緣者誰とて異議を挿むべき

空海發願の伽藍は、早く基礎築かれぬ、八月麻呂諸方に勸進して、速かに土木の工を起すべしとなりき

（三）

その年の夏も半ならんとする時、大宰の大貳從四位下藤原藤嗣より、太宰府の東二町あまりの所にある觀世音寺へ移り住まるべき旨沙汰し來りぬ、そは四月二十九日付を以て、正六位上行大典大村直繼麻呂勅を奉じて符牒を觀世音寺へ下したる

結果なりき

符牒の要は、入唐廻來の學問僧空海、笈を遠藩に負ふて、大道を耽り嗜み、空しく往きて滿ち歸りぬ、優れたる學稱す可し、今歸朝するに及びたれば、暫く彼の寺に住はせ、宜しく入京の日を待つべし、と云ふにありき

即ち空海は、京都よりの沙汰に由りて、觀世音寺を當分の住居とし、こゝに請來の寶荷をおろして、經典、論疏、品々の整理に從ひぬ

觀世音寺は、平城の東大寺、下野の藥師寺と共に、日本三戒壇と定められたる大伽藍にして、九州第一の巨刹なり、四十九院の本寺一として佛の座ならぬも無く、春の花は法の雨と散り、秋の月は七寶の珠と光りて、僧淸く、境靜かに、佛菩薩日に影向す

されば新歸朝僧空海淹留の道場として、最も適當の地と見ゐき

兎角するほどに、八月麻呂等熱心勸進の德現はれて、喜捨日に多く、錢材山の如く集りて、伽藍造營の事次第に運ぶ、空海は一面に普請を督しながら、一面に經疏

道具を整理す

空海が住みたるは觀世音寺四十九院の一坊にして蕭索たる松の庭に清水の湧渓と湧き出づるがありき、（此坊後に弘法寺と云ひしが、いつの間にか廢絶しぬ、されど清水は滾々として絶えず、弘法水とて今もあり）空海は日夜水の音に心を澄まして伽藍成就を諸佛に祈る、その功德空しからず、博多の海邊勤行寺のありし處に、四町四方の大叢林成りぬ、空海の歡び譬へんに物無かりき、即ち大唐より持ち來れる獨鈷杵及び佛舍利一粒を藏め、東長密寺と號けぬ、密敎東漸して、長く來際に傳はらんことを誓ひてなりき

是れ實に本朝に於ける密敎道場の最初なりき、佛滅後一千七百五十六年、両部の大敎創めて此土に弘まるべき瑞相、荒津崎の松の梢を曈々として上り來る日の光に現はれ見ねき

東長密寺の造營成ると間も無く、朝廷勅して、請來の法文、道具、曼荼羅等を隨身し、上洛すべき旨仰せ出され、續いて、請來の聖敎を天下に流布せしむべきの

由宣下ありき、空海の本望、これにて足り、眞言初一の高祖これにて定まる

（四）

天下に向つて密敎を流布すべきの由、聽許を受けたれば、空海は直ちに大和國久米寺に錫を曳いて、その塔の中に、自ら大日經の疏を講じぬ、曾て此寺東塔の柱の下に善無畏所納の經王を得て、入唐留學の宿志を遂げたる因緣あれば、廻朝の最初まづ此の砌に來り臨みて、密敎傳道第一の聲を發ケるなり

空海の左右には智泉堅惠の両弟子供奉して花を捧げ、法席には南都諸寺の老龍稚象ひし〳〵と詰め掛けぬ、然も一萬餘の有勢の神祇、目のあたりに容儀を現はし、耳を傾けて聽問ある、これ實にその年十一月八日の事なりき

此の聽衆の中に、大安寺泰基和上の徒弟實慧とて、二十二歳の沙門ありしが、空海の講演を聞き、密敎の玄機を悟り、即座に名刺を献らせて、その法弟たることを約しぬ、實慧は空海と同じく讃岐佐伯の一族にして書博士たる佐伯直葛野酒麻呂について儒書を讀みたるが、後佛門に歸依して、泰基の門弟子となりたる者なり、實

慧やがて第一の高足と呼ばれ、空海をして『吾が滅度の後に、諸弟子の依師長者と爲す可き』旨を遺言せしめたる大德なりき

此事終りて後、奈良へ出で、石淵寺に勤操僧都を訪ひ、東大寺に修法修行の跡を見て、智泉、實惠、堅惠の三弟子を伴ひ、河内より和泉へ入りて、剃髮の道場槇尾寺に入りぬ

太政官符を賜ひ、課役を免除すべき旨を達せられたるは、大同三年六月十九日にして、空海三十五の時なりしが、翌四年二月三日、法の爲めに名刺を天台和上最澄に投じぬ、深く心に決する所ありて、顯密同舟、手を携へて諸人敎化の任に當らんとしたるなり

此年七月十六日、和泉の國司へ太政官の符下りて、僧空海を京都に住はしむべき旨沙汰せられたれば、空海はやがて槇尾寺を出て京へ入りぬ、加茂の川邊に秋風立ちて、眞葛が原の萩の露、御法の光を宿す時なりき

和氣太夫眞綱、兼て深く空海の德行を慕ひて、師檀契り深かりければ、やがて請

ひて洛西高雄山寺に迎ゐぬ

高雄山寺は稱德天皇の御宇、神護景雲年間和氣清麻呂勅を奉じて、宇佐の宮に參詣したる砌、八幡八菩薩の神勅を蒙ることありて建立せしより、玻璃の妙界として朝廷の御歸依淺からず、最澄法師の建立せし延曆寺と併び稱せられて、一たびは法師が灌頂の道場とも爲りたる靈場なり

されば空海の爲めには懷しき由緣あり、初めて見る松杉なれど、前生の因果自らに伴ふが如く、初めて聞く水聲なれど、前世の契り自らに深きが如く思はれて、夢いと安く、心沈着きて、日ごと山房に閉ぢ籠り、練行禪觀懈りなく勤むるほどに、天台山の最澄法師は、八月二十四日、弟子の經珍をして、大日經、略攝念誦隨行法一卷、大毘盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法一卷、大日經供養儀式一卷、不動尊使者秘密法一卷、悉曇字記一卷、梵字悉曇釋一卷、金剛頂毘盧遮那一百八尊法身契印一卷、宿曜經一卷、大唐大興善寺大辨正大廣智三藏表啓碑三卷、金師子章幷びに緣起六相一卷、華嚴經一部四十卷の借覽を求め來りぬ

空海はやがて快く貸し與へぬ

空海と最澄とは、當時の佛教界に於ける二大明星なりき、最澄は朝廷の信任を得たる點に於て、早くも延暦寺を創立し、天台の奥義を流布し、王城鎮護の實を明かにしたる點に於て、皆な一日の長ありき、されど修錬の功に至つては、空海或は兄なるかも知れじ、密教の唱道日尚淺けれど、近く道俗の信仰を蒐め得たるに見てその教旨何れに長短あるかも知れじ、空海は刺を投じて長者に對する禮を守れば、最澄は經藏を借用して、心に他意無きを似す、比高二嶺路隔りたれど、朝雲間なく往來し、顯密二教道異りたれど、信念自ら合し、入つては佛法の護持者たり、出ては佛門の同朋たり、即ち互ひに許す所ありて、謙讓の德双方の間に流る、此の事を傳へ聞く者、何れも両傑僧の襟度に感服せぬはあらざりき

その年十二月十日、宇佐八幡太菩薩、高雄山寺に影現したまひき、即ち空海は八幡大菩薩の御影を描き、八幡大菩薩は空海の影像を畫かせたまひき、互の御影と云ふは此なり、長く納涼房に藏められしを、鳥羽法王の御時、勝光明院に遷され、

後又た男山八幡宮に奉遷したるが、建久八年文覺上人申し請けて、神護寺に崇め藏めぬ

それと前後して、眞雅入門の事あり、此時僅に九歳なりき

此の年天皇御位を皇太弟に讓らせ給ふ、嵯峨天皇やがて此なり、先帝を太上天皇と稱へ奉る

（五）

翌大同五年河内國石川郡紺口郷の山中に草庵を結び、智泉、眞紹等の門弟子と共に修錬しぬ、時は夏の初めにして、山氣水の如く澄み、白雲翠松の間を繞りて、紅花時にその間に點綴す、原は役優婆塞の舊跡と聞こゆれど、佛閣僧房の構ゐも無く、葎の露徒に繁く、松風の音獨り騒がし、傍に和泉河内両國の通路ありて、山茂り樹木蔭を作るが故に土俗呼んで蔭路と云ひ、稍々訛りて、向下路と云ふ、此の邊の土地を總稱して、嘉宇下と呼ぶは此の爲めなりき

空海は、和泉の槇尾山に舊縁を訪ひたる序、河内の山々を巡りたるに、不圖こゝ

へ出でたれば、やがて止まりて形ばかりの小庵を作り、弟子等と共に淹留しぬ、曉出でゝ谿川の畔を逍遙すれば、殘月光りを放ちて、虫の音にも經音を聞くが如く、夕に入りて竹緣の端に坐すれば、嵐氣袂に滴りて、星の影にも威靈を感ず、草深く苔繁き山中も、空海錫を止めてあれば、やがて瑜伽の道場なりき、彼の名高き

閑林獨坐草堂曉三寶之聲聞二一鳥一鳥有レ聲人無レ心聲心雲水俱二了々

の詩を賦したるは、此地修錬の夜、佛法僧鳥の鳴くを聞きたる時なりき

此處に高貴寺を建立したるは、此の砌の發願とぞ聞こゑし、即ち手づから五大明王の像を彫んで安置し、自ら八功清冷之水を掘つて、大般若經を書寫し、住吉大明神を請じ奉つて、長く伽藍の鎮守とす、これ光明遍照高貴德王大菩薩の神託に由る所なりとぞ、高貴寺を寺號としぬ、八月八日造營全く就りたる時、長さ四尺八寸、幅二尺八分、厚さ五分の木塔を樹て「千王の追福を資せんが爲めに、五輪の制底を刻む、此の一善の功德を以て、彼の四身の妙果を廻らす、乃至蠢々、皆是如々と」銘しぬ、此木塔長く寺の秘藏となりき

高貴寺の普請まだ成就せざる中、心願の事ありて、聖德太子の御廟へ日參し、一百日の間を限りて、一心に修法供養したるが、その九十六日目に當る八月十五日の夜半、月冴ねて露白く、金剛葛城の山々に烟淡く棚引きて、何處ともなく水の音を聞く、まことに秋の最中の月、一年のさやけさを一夜の中に籠めたる如き清くさやけき最中の月、照らぬ隈もなく照りて、天地清淨、人も、家も、草も、木も、悉く白玉盤中に容れたる如き思ひぞする

空海は此の景色に包まれて、虛心の境に入りたる時、御廟の中に微妙の聲ありて小く、微に、大般若理趣分を誦するが聞こゑ、その音に從れて、光明麗しく輝き出でぬ、空海は果して靈感ありと嬉しく、更に祈念を進めつゝ

『此の妙事、誰人の御所爲か、願くは示現あらせたまへ』と祈りぬ

折から、御廟の御前に、一大光明輪輝き渡りて、それに包まれたる貴高の御姿歷々と現はれ出でぬ、美はしく妙なる御聲にて

『われは是救世大悲の垂跡なり、われ昔、安養世界にありしが、日本の衆生に

利益せんが爲め、彼の安樂を捨てゝ、此の穢土に來る、我が母后は是我が本師無量壽如來の化身垂跡なり、我が女妃は亦た得大勢至菩薩の和光なり、三尊契を結んで生を大倭に受け、已に若干の寺院を建立し、又た若干の僧尼を化度し畢んぬ、然も遷化年久しければ、彼の三尊に擬して三所に遺骨を併ぶ、母公を中尊とし、夫妻を脇士と爲す、見よ〳〵』と宣ふ下より、光明一段に輝き渡りて、その中より彌陀三尊の御影現はれ、朗かに法華勝鬘の大乘要文を誦したまふが聞こゑぬ、見佛聞法の力に依りて、空海こゝに第三の發光地たるを証し得たるなり

空海は太子の御姿、やがて光明赫灼たる間に消ゑ失せたまふを拜み終りて後、清々と天にも昇る心地しつゝ、御廟西方の石を削つて、その夜の由來を彫り付けぬ、其詞に

『西土ノ三尊ハ權迹ヲ馬臺ニ垂レ、東家ノ四輩ハ菩提ヲ安養ニ成ス、三尊ノ位ニ擬シテ、三骨ヲ一廟ニ納メ、三乘ノ敎ヲ表シテ、三床ヲ一墓ニ幷ブ、母公ト云フハ西方ノ化生也、夫妃ト云フハ東土ノ救世也、此ノ靈廟ニ參詣ゼン輩ハ、思念

ヲ九品ノ淨刹ニ成シテ、往生ヲ安樂ノ寶池ニ遂グベシ、誠ニ是レ濁世末代ノ規摸清淨無漏ノ靈陵也』

とあり『大師を三地の菩薩と申せし事唐朝にてもありけれど、自ら宣ひける事は此の時なりけり』と行狀圖繪の作者は云へり

空海は、初めより深く聖德太子を信仰しき、太子の示現に照らされて、十地の中の三地菩薩なるを証し得たると共に、『汝は我の後身なり』との御示をさへ蒙りぬ

空海の身いよ〳〵光り、空海の名いよ〳〵輝きぬ

弘仁と改元ありしは、此年九月十九日なりき

御遺告　其十四

若し此の池の龍王他界に移らば池淺く水を減じ、世渺く人乏しからん、方に此の時に至りては、須く公家に知らしめずとも、私に祈禱を加うべきのみ、亦灌頂を授くる者蓋し以て員多し、具に之を注さず、若し灌頂の流れを存せる者は、我身より始まり、秘密眞言此時にして立つ……

第十九章　密法の功力

（一）

空海は召によつて參内しぬ、大内山に秋霞麗しく靉靆きて、菊の香朝日の前に匂ふ九月初めの好き日なりき

畏れ多くも一天萬乘の大君は、枯木寒巖の沙門を召して、拜謁を仰せ付けられぬ玉座の邊り一面に光輝充ちて、宛らに日の御光を拜み奉るが如く羞明く、普通の者ならましかば、勿体無さに息の根も止り、双の目も盲るべきを、空海は水の如く清く、火の如く熱き、敬虔の念をもて、恐れみ畏み咫尺し奉る、空海は山林修法の沙門なれど、心には八幡大菩薩を宿し、胸には聖德太子の御影を描きぬ、爪の頭の頭までも、國家鎮護の一念罩り、微に吐く息の根にも、衆生濟度の願望滿ちて、墨染の法衣の袖も薫りて見ゐき

天皇の御聲は沈みて聞かれき、國家の一大事につきて、秘密に空海へ御諮問あらせたまふ所ありたるなり

一大事とは、去年より南都の舊都に御幸ありし太上天皇御重祚の望みおはして、ひそかに右兵衛督藤原仲成等を語らはせたまふ旨、頻に内報ありしに由り、深く宸襟を惱ませ給ふにてぞありける、これ然しながら太上天皇の御志にはあらず、御寵愛の尚侍藤原藥子（仲成の妹）、再び太上天皇の御代と爲し參らせて、おのれ皇后ともなるべき非望を懷き、内々聖意を動かし奉るに由る、此れ正しく天下亂階の基、國家騷擾の崩たるべし、速かに八幡大菩薩に祈願して、動亂を未だ發らざるに鎮めよ、との宣旨なりき

空海は畏みて御前を退き、寶祚長久國土安穩の祈念を凝らすべく、急ぎ東寺に壇を築き、息災護摩師を實惠に、增益護摩師を堅惠に、呪頭を智泉に命じ、別に五大尊供、十二天供、聖天供、神供、舍利守の諸役を設け、自ら大阿闍梨として修法の壇には上りたるなり

儀式は極めて莊嚴なりき、嚴密なる用意と、熱烈なる忠義心とをもて、一圖に國家鎮護の任に當らんとするなれば、空海は初夜の行より丹誠を抽でゝ、一心不亂に

祈念修行しぬ

その滿願の夜なりけり、八幡大菩薩三所の御体（法体、俗体、女体）に武内宿禰を具させ給ひて、朦朧と立ち騰る塗香の烟の中に影現ましましぬ、これ正しく御願成就の御示なりき、朝敵退散、國家安堵の瑞相なりき

藤原仲成は紀清成が射出せし鏃に仆れ、藥子は毒を仰いで死し、太上天皇幷びに皇太子高岳親王（太上天皇の皇子）は、南都に於て落飾あらせられたる旨注進ありしは、まことに八幡大菩薩影現の刻なりけり

密敎の光輝、この不思議の利益に由りて、いよ〳〵朝野に遍滿しぬ、從來は空海の修法學問を認めながら、新來の宗門、何をか爲さんと輕しめ居たる南都諸寺の高僧沙門等、目を側め心を傾けて、齊しく高雄山寺を重視するに至りぬ、少くも『油斷ならぬ沙門よ』と、半は恐れ、半は嫉みて、深く意を注くるに至りぬ

（二）

藥子の亂は、斯くして平定しぬ、春日の森に秋風そよ吹き、猿澤の池に紅葉の波

鎭まりて、人々太平を謳歌する中に、怪しき風聞魔の如く、平安南都の巷々を襲ひ來りぬ

そは『太上天皇切角の思召し立が、物の三日も經たぬ間に水の泡と消ゆるまで、平安の御手筈行き届きたるは、正しく空海阿闍梨秘密の後押に由る所なり、されば藥子仲成を仆したるは、阪上田村麻呂等武將の力にはあらで、空海の法力なり、まことに空海こそ降魔の劒を目に見ねぬ秘密の中に揮ひたれ』と云ふにてありき

この事を傳へ聞きて、安からず思召したるは高岳法親王にてぞありける、父太上天皇と共に、御髮をおろして、春宮は出でさせたまひたれど、燃ゆるが如き憤怒の焔は消さんとしても消ねる時あらざりき

由つて潛かに空海に怨みを抱いて、いつかは妄執を晴らさばやと思召し、人して東寺を見させたるに、空海は、八幡大菩薩影現の尊像を、最初は紙に寫し、後には木に彫みて、社壇に安置したる後、高雄へ歸山せりとの事知れぬ

よし、さらば彼の僧の瑜伽定室を驚かして、深き恨みを晴らさん、と憂悟し、只

獨り高雄山寺に登る、冬の初めの山嵐颯々と谿間に鳴りて、谿水の岸を打つ音、且つ聞くからに潺湲たり、潛びて僧房を窺へば、心字香絶ねて、夜の燈火水よりも冷かに、立ちて簀子縁を辿れば、山氣窓を穿ちて、深き暗裾に上る、法親王の御手には惠恚の焔燃ね立ちて、握りたる御劍の柄今にも碎くるかと疑はれ、踏む脚に力罩りて、今にも床を貫かんず勢ひなりき

假へば、空海活如來の再來なりとも、赤き血劍氣に觸れて迸り、設へば鐵塔石室の中に坐すとも、白き骨殺氣に碎けて飛ばん、いで、と心を鬼にして、空海が閉ぢ籠る定室近く進み入らせぬ

然も、忽ちにして感じたるは、異香馥郁として襖の間を漏れ出る事なりき、その香、人間界の物にはあらず、一たび鼻を撲ち來る時、紫雲その間に浮ぶが如く、一たび心に薫じ去る時、微妙の音樂何處かに響くが如し、法親王の胸に燃ねたる惠恚の焔火は、その異香に打ち消されて、自らに絶ね、法親王の御手に漲りたる殺氣はその妙たる音樂に散らされて、忽ちに力の脱けたるを感じぬ

されど尙一片の執着はありき、されど尙血に飢ねたる獸心の影は殘りき

御劍の柄に手を掛けて、そつと裡面を窺ひたまへば、燈明ほの暗く、塗香の烟長く騰る處、不動明王の尊像を祀れる處、寂寞として物の音も無く澄み渡る處、空海は秘印を結びて端座し居たり、その樣、寒巖兀として枯木に倚るが如く、山花自らに開いて古廟の壁に香るが如し

『撲たば今ぞ、今の油斷の瞬間ぞ、此の恨み思ひ知らせう』

一たび消ね失せたる殺氣は再び全身に漲り渡る、惠恚の焔烈々として胸に燃ね立つ、右手を柄に掛けたるまゝ、定室に足を容れんとする時、あな不思議、空海の身に燦然たる光りさして、大菩薩の威容自らに現はれ來る、例へば法親王の胸に抱かせたまふ焔、忽ち空海の肉身に輝きて、美はしき淨光となるが如く、法親王の心に漲る恐ろしき殺伐の氣、自ら空海の容に轉じて、大慈悲の尊容と現ずるが如く見ねき

御劍いかに鋭くとも、何れにかその尖頭を當つべき、怒氣いかに烈しくとも、何

れにかその魔心を漏すべき、足縮みて進まず、心空しく躊躇ひて、口惜しくも意下る、遂に發心して

かくばかりたらまを知れる君なれば
たく蘖多までになりのぼりけり

と詠みて手にせる御劍をからりと捨て給ふ、歌の心は、斯くばかり佛法を究めたる沙門なれば、生きながら菩薩には爲りたまふやらんとて、深く歸依の心を現はせるなり

空海は寂然として座を占めたるまゝ、法親王が詠みたまふ御歌の下より

云ふならく奈落の底に落ちぬれば
刹利も毘舍もへだてやはする

と和しぬ、歌の意は、一たび奈落の底に落ちては、貴賤の隔てなく佛菩薩の手に救はれんと云ふにてありき

法親王はいよ〳〵感じて、遂に空海の弟子となりぬ、後に眞然阿闍梨と呼ばれて

高野山に遍明院、親王院を建立なさせられ、齋衡二年九月には、勅を奉じて、東大寺大佛の首を修補あらせられぬ、空海高弟子中の一にして、行法學問幷びなき大德なりき

御遺告　其十五

夫れ師資相傳し、嫡々繼來する者なり、大祖大毗盧遮那佛、金剛薩陀菩薩に授けたまひ、金剛薩陀菩薩龍猛菩薩に傳ふ、龍猛菩薩より下、大唐の玄宗肅宗代宗三朝の灌頂の國師待進試鴻臚卿大興善寺の三藏沙門大廣智不空阿闍梨に至るまで六葉なり、嘉果は則ち其の上足の法化也、凡そ付法を勘るに吾が身に至るまで相傳八代なり、吾が到りし日、彼の大阿闍梨曰く、我が命已に盡きなんとす、汝を待つ事已に尙し、已にして果して來れり、我道東せんと、故に吳殷が纂に曰く、是れ凡徒に非ず、三地の菩薩なり、內には大乘の心を具し、外には少國沙門の相を示す云々、大阿闍梨御相弟子內供奉十禪師順曉阿闍梨之弟子玉堂寺の僧珍賀申して云く……

第二十章　仁王經

（一）

空海夙くより仁王經の大法を修して、國家鎮護の志を遂げんとする望みあり、東寺に八幡宮の奠禮を終りて後、高雄山寺に閉ぢ籠りて、公家の召させたまふことなくば、都へ出づる事もなく、山房の一室に端座して、修法修錬を努めたるが、斯くても尙妨げ多かりしかば、十月二十七日表を上つりて、法を修せんことを請ひ申しき、これ實に空海本心の發露にして、密法の精神を罩めたる者、こゝにその大要を記さん

空海幸に先帝の造雨に沐し、遠く海西に遊び、たまゝ灌頂道場に入り、一百餘部の金剛乘の法門を授かるを得たり、其の經は則ち佛の心肝、國の靈寶なり、此の故に大唐の開元以來、一人三公親しく灌頂を授かり、誦持觀念す、近く四海を安んじ、遠く菩提を求む、宮中には則ち長生殿を捨てゝ內道場と爲し、復た每七日解念誦の僧等をして持念修行せしむ、城中城外には鎭國念誦の道場を建つ、佛國

の風範また是の如し、その將來する處の經法中に、仁王經、守護國界主經、佛母明王經等の念誦法門あり、佛國王の爲めに特に此の經を說きたまふ、七難を摧滅し、四時を調和し、國を護り、家を護り、己を安んじ、他を安んず、此の道の妙秘典なり、空海師授を得ると雖も、未だ錬行すること能はず、伏して望むらくば、國家の御爲めに、諸弟子等を率ひ、高雄の山門に於て、來月一日より起首し、法力の成就に至るまで、且つ敎へ且つ修せん、其中間に於ては住所を出でず、餘の妨げを被らじと思へばなり、此の思ひ、此願ひ、常に心馬に策つ、況や又た我を覆ひ、我を載す、仁王の天地目を開き耳を開く、聖帝の醫王をや、報せんと欲し、答へんと欲するに極り罔く際り罔し、伏して乞ふ、昊天欺誠の心を鑒察せんことを、懇誠の至りに任へす

由つて壇を建てゝ法を修す、仁王經その最初にして、都合五十一度に及ぶ、これ實に眞言最初の道場なりき

斯くして次第に精進す、弟子僧實惠の爲めに壇を立てゝ、灌頂の職位を授けたる

も此の年なり、空海歸朝の後、法を傳へたるは之を初めとす

（二）

此年の季、仁王經等の修法成りたる時、勅して東大寺の別當に任じ、西室に住居すべき旨仰せ出されき

東大寺は聖武皇帝勅願の精舍にして良辨僧正の草創なり、良辨僧正初めて寺の別當に補せられしより以來、良興、良惠、靈義等我邦佛門の棟梁相續して、法燈長へに明く、伽藍偏に光りを增す、此時に當りて特に空海を別當に補し、善無畏三藏の舊蹤に倣かせられしは、主上深く思召す處ありしなりと聞こゆ

善無畏三藏印度より渡來して、初めて錫を駐めたるは、東大寺西南の隈なりき、空海曾て大毘盧遮那經を久米寺東塔の下に得、日夜に研究して、その疑義を晴らさんと試みたる時、又た此の舊跡に閉ぢ籠りて、一心に佛菩薩の示現を祈りき

夫等の舊緣忘れ難き處、密敎弘通の最初に於て、當寺の別當に補せられたるなれば、空海は滿足して高雄を出でぬ、昔馴染の堂塔伽藍、われを迎うるが如く輝き、

昔ながらの山容水態、われを慰むるが如く媚を送る、空海は法に由りて、入寺の式を行ひ、西室に座を定めて住みぬ

東大寺は天子勅願の靈刹、大聖居住の道場なれど、辛國の化身と稱する長さ五六寸の大蜂出でゝ人を害する事屢次あり、中には螫されて命を落すもあり、一生不治の大病に罹るもあり、近頃又た六人の死者を出したれば、護法堅固の僧徒を除く外は、恐れて他寺に移り行くも少からず、これに由りて學業漸く廢れんとしたりければ、心ある者嘆き悲しみて、これ寺の大魔なり、此の大蜂滅せざる間、法燈の輝き、前の如く爲ること能はじと、內に眉を顰めたるが、空海西室に來りしより後、さしもの大蜂姿を潛めて、再び人を害ふこと無かりき、之に由りて一たん寺を去りたる者再び歸り、學林前の如く繁昌して、山門の上に照る朝日の光り、赫灼と四方を照らしぬ、京畿の緇素、此の事を傳へ聞き、流石は入唐和尙の威德ぞ、恐るべく敬ふべしとて、只管感嘆したりとなん

南院を建立して曼荼羅院と名け、弟子僧眞雅に付したるは、此間の事とぞ聞こゆし

第二十一章　両部神道

（一）

空海は常に密敎の本意より見て、神佛一躰の主義を抱持しき、法の極まる處、聖凡一致、紅白一色、神智神德、佛智佛德、何れに高下無く、何れに輕重無し、天地と共に圓滿にして、亦た日月と共に長久なり、日本に現はれて神道となり、天竺に顯じて佛道となる、神佛と名は異れど、それに由りて諸人を敎化し、民人を示導し來れる功德に至りては同一なり・故に神を信ずる者、佛に歸依するに同じく、佛に歸依する者、神を信ずるに異らず

『神道の傳を受けざるもの、佛法の奧儀を悟ること能はず』

と云ふ、これ空海の大抱負大主義なり、空海の經を說く時、必ず本意を國體の上に置きて、寶祚の萬歲を祈念し、空海の法を修する時、必ず本願を神道に懸けて、萬民の福利安穩を誓ふ、佛敎傳來して後、兎もすれば神道の有難きを忘れんとする者あるを見、神佛不二を說き、神佛並信の道を明かにせんとしたる者少からねど、

空海の如く適切に、空海の如く確的に、空海の如く眞實に、根本義を定めたるものあらざりき、空海が

ありと云ふ有るが中にも取わけて
神道ならで成佛は無し

との歌に、この大主義を明かにしたるは、萬古に亘りて滅する時なき大功德大偉力にあらずや

空海は此の意義に由りて、神佛に一念成就を誓ひ、法內法外の人に向つて、熱心に素願を說きぬ、空海熱烈の心、一國に國家と敎義とありて、一點の私心無き火の如く熱烈なる心、やがて天地を貫き、乾坤に徹して、弘仁二年二月一日、神道灌頂を受くるに至りぬ

神道の灌頂は、三輪流の血脈として、神道二十四代中臣淸麿より、その子諸魚に授け、諸魚より智治麿に授けたるにて、神祇官領長上神祇大副中臣智治麻呂實にその師範たりき

當日は主上（嵯峨天皇）の勅に由つて、齋場所に神道灌頂を授け奉り、續いて空海に授け畢る、主上御寶算二十五、空海は行年三十八なりき

此時、師範たる智治麻呂に素絹を賜ひたれば、やがて奉拜して着用したるに、空海へも下し賜はるべき御沙汰出でぬ、空海は畏み拜受し奉りて、智治麻呂と同じく着用す、素絹は畏れ多くも主上の御祭服にして、生絹を用ふ、當時法中に着用する素絹の製と約同じ

空海はこゝに恩賜の素絹を着たれど、圓き頂に烏帽子を冠ることならねば、早速に思ひ付きて、素絹の襟を引き延し、相好と稱して帽子の姿に擬し着しぬ、後々相好の中に薄板厚紙などを入れ、三角の形にして、襲の衿に付くるは、遠く空海に濫觴せるなり

紫宸殿に於て、両部神道の本義を講じたるは、それより十一年後の弘仁十三年四月十八日なれど、空海の大理想はこゝに端を開き、神佛一躰の大眞理はこゝに光を見せたるなり

（二）

本地垂跡說は、行基菩薩に由りて第一聲を擧げられ、空海に至りて完全に形式を備へられたる如く見ゆれど、空海の所立は、本地垂跡にあらずして両部神道なり、空海の大主義は神佛両道の調和なり、故に空海の根本義より見る時は、本跡不二にして神佛一味なり、空海は國体を基礎にして佛を說き經を說く、神道の精神を明鏡にして、佛法の智惠德相を映す、神佛両部の調和全く成りて、空海の理想立ち所に活現したるは日本の大小神祇、その心を嘉し給ひたるに因る、空海の德千萬年に通じて滅せず、高野の靈威古今に卓越して獨り高きは、その誠意長へに天地に遍滿すればなり

空海の心は神にして佛なりき、佛にして神なりき

第二十二章　灌頂

（一）

神道灌頂の事終りて幾許も無く、比叡山の座主最澄より書を寄せて、密敎の傳授を請ふ旨申し納れぬ、其文極めて丁寧、その意頗る懇懃なりき

空海は同じ年十一月九日、山城國乙訓寺の別當に補せられたれば、高雄山の僧房を出で、都近き寺院に移る、乙訓寺は推古天皇の御願にして聖德太子の草創なり、太子は空海の崇信極めて厚く、曾て上宮の御廟に三體の示現を蒙りたる事あり、緣故深ければ歡びて勅を奉じて、諸弟子と共に入山す、境内冬寂びて、樹木皆な骨を露はしたれど、空海の威靈一たび見ゐて、枯れ枝も花を着くる感ありき

その夜八幡大菩薩の示現を受けて、直ちに自影の彫刻に手を着けたるに、八幡宮やがて影現ありて、手づから首を彫ませられぬ、實に密法擁護のしるしにして、神佛合體の御影なり

空海は斯くて乙訓寺に止まること一年餘り、翌弘仁三年十月二十七日、最澄は自

ら空海をその僧房に訪ひたりき、最澄は當時に於ける佛敎界の權威にして、天台宗を開創せる大德なり、最澄の住める比叡山は、王城守護の本願に由りて開かれたる靈地、その延曆寺は桓武天皇の勅願に掛る、南都諸宗の大德も、その高きを仰がざる無く、公卿百官も、その法燈の赫灼たるを歸依せざるなし、然も空海には先輩たり、佛敎全体の上からは中興の阿闍梨なり

斯る大德の身を以て、後進たる空海の室を訪ふこと、恐く求法修行の熱誠に出づ、その心玲瓏たり、その意清淨たり、佛界第一の長者を引き付けたる空海の弘德、道の爲めには先後を問はず、自ら卑うして空海の僧房を訪ひたる最澄の美德、千古の双璧として始終に光輝あり、最澄が空海に贈りたる書簡の一節に『遮那宗と天台と、融通疏宗亦た同じ、誠に彼此志を同うして俱に覺むべし、彼の人豈に已の法に愛憎あらんや、法華金光明は先帝の御願、亦た一乘の旨は眞言と異る無し伏して乞ふ、遮那の機を覺め、年々相計つて傳通せしめん』とあり、これ豈に最澄の本意にあらずや、此の意やがて空海の所志と一徹融合せしにあらずや

空海と最澄とは、僧房に膝を交へて、佛典の肝心を語り合ふほどに、夜は更け行きて、乙訓川の水の音、滔々と響き渡る

最澄が空海について、兩部の灌頂を受け得んと願ひ、空海が快く承諾きて、他日を約したるは此の時なりき、やがて最澄の望むに任せて、二部の尊像を示し、又た兩界の曼荼羅を開帳しぬ、最澄は密法の眞意義に到達することを得て、信念ますます加はり、受法灌頂の望み催促いよいよ盛んにして、夜と共に語り明し、翌日後日を約して別れぬ

空海は最澄を門外まで見送りて、比叡山おろし肌寒き門邊に手を別ち、法衣の袖を飜へして門内に入らんとし、只見れば園内の柑子累々と黄金色の顆を聯ねて、薫香厭々と釉に染み來りぬ、空海は忽ち想ふ

柑橘よく霜を凌ぐ、この節味ふべし、數を問へば千に足り、色を見れば金の如し金はこれ不變の物、千はこれ一聖の期なり、此の菓もと西域に出づ、今日天台の座主を送りて、別離の目に此の吉祥の色を見る、何等かの因緣無くてはならじ、謹んで乙夜の覽に供へて、献芹の微意を致さん

『願演やある、願演やある』

願演は寺僧なりき、空海の前に蹲る

『この柑子を宮中に献らせばやと思ふ、色好きを摘み取れ、われも手傳ふ』

やがて色好きを清淨なる籠に盛り、願演をして奉進せしめき

（二）

空海はその翌二十九日、乙訓寺の別當を辭して、再び高雄山寺に入りぬ、最澄よりは受法灌頂の事に就いて、屢次慇懃丁寧の書を贈りしが、十二月十三日灌頂の調度物として、署預一籠（三寶に供する料）署預子二籠（一籠は三寶に供へるの料、一籠は空海に供へる料）海藻一裏（空海に供へる料）糖二小瓮、一瓮は三寶に供へる料、一瓮は空海に供へる料）を智泉の許へ進上し、別に一簡を添へて

『最澄今追つて種々の物等取り集め參向し、來月十日を以て阿闍梨の大慈悲を蒙り、大悲胎藏并びに金剛界壇場に入らんと欲す、員外御弟子の列と成る、伏して乞

ふ、法兄好く大阿闍梨に聞かしめよ』との意を副へぬ

斯くて翌日自ら登山し來り、空海に謁してそれ〳〵受法の用意に掛りぬ、同時に灌頂の道場に參すべき和氣播磨大椽眞綱、和氣大學大允仲世、美濃種人つぎ〳〵に登り來る

空海は密教所立の眞意義を奉する爲め、壇場受法の人に對して、僧俗の差別を立てざりき、もと是聖凡一味、曼荼羅の光に包まれ、五智の法水に浴し來らば、俗人も又た聖、凡人も又た佛、事理は一ありて二無く、迷悟歸する所一のみ、人も、佛も、天も、地も、森羅萬象一切の物、何物か即身成佛の妙域に至らざるべきといふ最澄と共に俗人の受法を許したるは此の本願に因りてなりき、空海所立の教義を現實に示したるなり

當時の僧侶生活が、いかに恬淡無慾なりしよ、身は一宗の開祖と呼ばれ、朝廷の國師と仰がれ、朝野の信仰を集めたる境界にあつても、米鹽の匱しきを訴へること屢次ありき、現に高雄山寺灌頂の場開けんとして、山上早く食物の缺乏に襲はれ

ぬ、最澄は見るに忍びず、直に叡山在住の高足弟子泰範に書を飛ばして、山寺食料都て盡く、速に米を乞ふて來れ、餘物を覓むるに及ばず、米穀あれば足る、との意を致し、更に壇越藤原左衛門督冬嗣に依頼して、灌頂を受くるの具備はり難ければ伏して援助を乞ひ奉る旨懇請しぬ

されど空海は此等の事に頓着無く、灌頂壇上の用意を急ぎ、十五日最澄等四人に金剛界灌頂を授け終りぬ

此事忽ち四方に聞こえたれば、奈良よりは東大、元興、大安、興福諸寺の大德先を爭つて參會す、叡山よりは座主の請に因れる米穀を齎せたる泰範を前に、賢榮、長榮、圓澄、光仁、光澄等の諸弟子駈け集まり、大僧の數二十二人、沙彌の數三十八人、この外、大唐より舟を共に歸朝せる高階民部少輔眞人、近士の數四十一人童子の數四十五人、惣數一百四十五人の多きに及びたるぞ目覺しかりける

即ち十二月十五日最澄を始め此等の人に胎藏界灌頂を授け終る、奈良諸宗の大德は更にも云はず、天台の開祖最澄が、空海の手に頼りて灌頂を受けたりとの事

が、いかに空海の名をして九鼎大侶の如く重からしめしよ

灌頂は眞言の秘法にして、又た眞言獨得の敎義なり、即ち諸佛の大慈悲に依りて加持せられたる五智の法水を、本心の頂上に灌ぐにあり、受者はその刹那に於て過去無數劫の昔より本心を覆ひ居たる煩惱の迷霧忽ち晴れ、一點の曇りだも無き自己の本心を開き、佛果大覺の尊位に登るを得るなり、大日如來と同等の位を得て、生佛不二の妙諦に達し得るなり

最澄は心に深く密敎の意義を味ひて歸りたるが、翌年正月十八日弟子泰範圓澄を空海の許に送りて、眞言法を學ばせき、空海はよく敎へ、よく導きて、三月六日彼等の爲めに金剛界灌頂を授けたりき

超ねて同じき七年の秋には、槇尾寺の勤操もろ〳〵の名德を引き率れて高雄山寺に詣でたれば、空海は慇懃に待遇して、舊恩の報ひ難きを嘆き、新法の意味深きを談じ、やがて三昧耶戒を許し、両部の灌頂を授けたりき、勤僧は空海入道の師にして、釋門秀逸の耆宿なり、殊に六十の老軀を提げて、舊門弟子を禮拜し、三密の

法脈を繼ぎたる事、まことに殊勝の所行なりと、心あるも心無きも、人皆な感せぬはあらざりき

御遺告　其十六

日本の座主、設ひ聖人なりと雖も、是れ門徒に非ず、須く諸敎を學ばしむべし、而るに何んぞ密敎を授けられんと擬する云々、両三般妨げ申す、是に於て珍賀夜の夢に降伏せられて嘗旦に來り至つて、少僧を三拜して過失を謝りて言く云々、又去る弘仁七年表して、紀伊國の南山を請ひ、殊に入定の處と爲す、一両の草庵を作り、高雄の舊居を去つて、移つて南山に入る、厥の峯は絶遙にして遠く人氣を疎てたり、吾れ居住の時、頻りに明神の衛護あり、常に門人に語るらく、吾性山水に狎れて人事に疎なり、亦是浮雲の類なり、年を追ふて終りを待つこと此の窟の東と爲さんと、太上法皇勅有つて詔し下して中務に安密せしめ供養すること月餘、還て更に高雄に居る、天長皇帝の即位に少僧都に任せられ、再三奏辭すれども許されず……

第二十三章　即身成佛

（一）

弘仁四年三月十五日、召に由りて清涼殿へ參りぬ、これ空海一期の曠にして、又た密敎根本の地位を定むる大事の塲なりき

空海は導かれて座に着きぬ、簀子縁の上には、法相、華嚴、三論、天台の大德多く集りて、空海の着座を待ち居れるが如くぞ見ねし、御簾深く鎖す處に、衰龍の御衣の端匂やかに見ねたるは、主上の出御あらせたまふかと畏し

最初の程は何事も無く見ねしが、やがて一僧の聲嚴かに

『即心即佛とは古よりの定義とこそ存じつるに、近頃即身即佛などいふ怪しき敎へを說く者ある氣に聞き及ぶ、これ恐らく邪魔外道の聲にやおはさん、佛法末世の時とは云へ、世に恐れ多き事にて在す』と空海に當て付ける如くして云ひぬ

空海は睫毛一筋動かさず、端然と座り居たるに、その詞の後を引き取りて

『まことや、心こそ清淨なれ、心こそ美しけれ、修行鍛錬を積みもて來らば、

やがて佛ともならうづれど、肉身は汚穢不淨ぢや、刺せば血が流れ、爛れては膿生ず、何んの處に佛心が宿るべきぞ、偏に曖昧な敎と知れた』

玉座近き殿上ならましかば、唾をも吐かん氣色なりき

されど空海は尙聞かざるが如く坐りてあり、一僧は圓なる眼を開きて

『そればかりではない、その邪敎では、衆生と佛陀とを差別せぬ、凡夫と大聖とを等々に見る、佛陀あつての衆生ぢや、大聖あつての凡夫ぢや、生佛同等と定まらば、何を以て敎化せう、只これ日月を掩ふの雲、淨水を汚すの泥土、須らく佛道以外に逐ひ放たねばならぬ』

痩せたる唇に泡を飛ばして云ふ、一座はその泡の如き詞より波ちて、法相の大德は、有、空、中の三意義を論じ、三論宗の阿闍梨は、中道の眞理に立つて大乘の妙極を說き、華嚴宗の和上は即心即佛の妙諦を議し、英匠鋒を爭ひ、大工鎬を削る、雲上の玉殿、法界物議の塲と化し去るべき氣色なり

名だゝる名僧殿上に集りて、辯才は浪を湧かし、論難は刃を研ぐ、有宗空宗の象

龍、說く所多岐に亘り、議する處、多端に分別すれど、必竟は鋒を揃へて空海を非議するにあり、耳馴れぬ密敎の義理に薄りて根本義を粉碎せんとするにあり、當時空海の名聲、朝野に亘りて朝日の昇るが如く盛んに、主上の御歸依漸く厚くして、信用他宗の上に出でんとし、一乘止觀の提唱者たり、天臺宗の開創者たる最澄すら、いかに法の爲めとは云へ、膝を屈して灌頂を受くるに至る、今の中に大斧鉞を用ひるにあらずば、遂に密敎の天下となりて、一沙門空海の爲めに、敎界を攪亂さるゝかも知れじと云ふ、此れ彼等の杞憂なりき

されば機だにあらば、各自各家の敎議を明かにして、後進宗たる密敎の鼻柱を挫かんとの心は、言ひ合さねど誰人の胸にもありき

然もその機會は目前に現じ來りぬ、彼等が鋒を鋭うして迫る事が、偶々密敎を石にかけて、彌が上にも光輝を增す資になるべしとも知らで、一座論難の火花を散らす、波立ちまさり、潮たけりて、海底の眞珠光りを現はすべき時來れるなり

空海は、溫容の玉と美はしく、心又た晴れたる空と澄みて、靜かなるは風絶ねて

樹梢の動かざるが如く、長閑なるは月宿りて水の波たざるが如し、常に忍辱を則とし、平和を體とすれば、絶へて人と爭ふこと無けれど、苟も敎義に關することは、些細な異議をも恕さゞりき、例へば野を燎く猛火の烈々と燃ね立ちて、尾花に交る小草の一葉とも漏らすまじき勢ひに似たりき、苟くも大日法身の果德に對して、一小石を投ぐるものあらば、風來つて樹梢の鳴るが如く、地動いて水の波つが如く、猛然と威儀を正して、降魔の利劍を翳さずには止まざりき、當相即道、即事而眞の眞意を說いて、敵を降伏させでは措かざりき

『即身成佛は密敎の本義なり、生佛不二は眞言の所立なり、聊も惑ふ所なくば、宇宙の森羅たる萬象悉く成佛せん、大日法身佛の萬德は何物の上にも顯はる、心も汚穢、身も汚穢、煩惱それに具はり、疑惑それに宿るとも、自の心まづ自の心を知り、進んで佛陀の心を知り、更に衆生の心を知れば、自心本來の本源忽ちにして前に開く、これ尙ほ身自ら佛なる事を知る道なり、已に自らの身と心と、佛陀の心身に異る所なきを覺らば、當位に於て大日法身の心身と融和冥合して、こゝに

燦然たる光輝を放つ、すれば我即ち大日法身、大日法身即ち我れ、その間に何の差別あらう、その時に於て、身口意の三業が、佛陀の三密に一致して、身に行ふ處、口に言ふ處、意に思ふ處、悉く佛作となり佛業となる、おのれの三業、佛陀に融和して、大日法身と平等の自覺を得たる時、宇宙の萬象はやがて曼荼羅の佛、山野の風光、江海の景色、おのづからの淨土となる、生けとし生ける有情非情、心ありて身なき物なきに、心のみ成佛して何處に住むべき、自ら覺れば迷界は極樂淨土、自ら知れば衆生は大覺圓滿、紙一重の間隔もおはしまさぬぞ』

空海の詞義明鏡を懸けて明かなりき、されどその義幽遠にして、性海の眞源を見るに由なかりき、此の時

『口にては何とも云はるゝ、證を見ん、穢れ多き煩惱具足の心身に成佛の時ある證を見ん』

座の一隅に斯く呼ぶ者ありき

（二）

空海の清き眼は燦として明星の輝くが如くに輝きぬ

『さらば現證を見せ申さん』

靜に然も沈着きて云ひ切りて、北面したる身を南方に向け直したるが、徐に智拳印を結び、意を三摩地に置き、舌頭に秘呪を誦すること三五遍、斯くてある事少時にして、殿中急かに羞明きを覺ゆるほど明うなり來りぬ、座上の僧侶は云ふも更なり、御階の下に打ち集ひて、世にも珍らしき論難を聞き居たる官人雜仕衞士の輩一樣に驚き怪み、不圖頭を擡げ見れば、燦爛たる光明、空海の肉身より現はれて、五体宛らに陸離たりき

僧も俗も『呵』と云ひたるのみ、開きたる口を塞ぎも敢ず、目を擦り、瞳孔を凝して見れば、面門見る〳〵中に開けて、頭に五智の寶冠現はれ、威容大毘盧舍那如來を成して、目前に生身即佛頓悟涅槃を證し、光明更に遍照し、福衆莊嚴の威儀忽ちに調ふを見、諸僧大德思はずも大地に下りて、合掌禮拜し、官人衞士身を投げて敬ひ禮しぬ

斯くてある事暫時にして、空海は元の本體に還復しぬ、光明滅して玻璃の淨界、水晶の妙宮と見ゐし殿上には、駘蕩たる和風吹き、大日法身の御姿と拜まれし空海の面上には、莞爾たる笑見ゐて、立ち所に生佛不二の實證を示しぬ

學匠も、大德も、事實の前に議論無く、現當の前に異論無し、只法衣の袖を搔き合せて、今の今まで泡を飛ばしたる口を噤み、慚愧を帶びたる目を伏せて、中には落涙する者さへありき

主上の御歸依は此時より更に一段の深きを加ゐぬ、密敎の光りいよ〳〵冴ゐて、照らさぬ隈も無く輝きぬ

御遺告　其十七

公に在るに、萬事遺無しと云ふと雖も、春秋の間必ず一たび往て看る、彼山の裏の路邊に女神あり、名けて丹生津姫命と曰ふ、其社の廻り十町許の澤有り、若し人到り着く時は、即時に傷害ぜらる……

第二十四章　高野開創

（一）

斯りける程に、月日は空海盛名の中に過ぎて、早くも弘仁七年の春とはなりぬ、空海阿闍梨は四十三歲、大唐より歸りて十年を傳法弘通の爲めに費して、こゝに密敎の基礎を築き上げぬ、大毘盧舍那佛の御光長へに東方の天地を照らして、國家安穩の基こゝに開け、衆生の福田こゝに成じ、天下泰平の實こゝに揚らん

阿闍梨が兼ての宿願を果すべき機會熟しぬ、明州より船を泛べて、八重の汐路を超ゆるの時、風浪暴く、あはや藻屑に葬られんとせしを、歸朝の後靈場を開創して、神恩佛恩に報ひ奉らんと立願し、僅に危難を免がるゝことを得つ、然も日月徒に過ぎ、星霜忽ち積りて、こゝに一紀を經たり、いつまで斯くてあらん、相應の勝地を選びて、修禪の梵宇を樹て、彼の素願を遂げ誓約を果さんと思ひ立ち、只獨り京洛を出で、大和國へ志しぬ、まづ舊蹤の地に由り、護國生利の處を尋ね、永久動きなき眞言の本地を開かんと決したればなりき

阿闍梨は行き〳〵て大和國宇陀郡に至る、旅枕幾日を重ぬる中に、深山の櫻散り盡して、至る處に嫩葉茂り合ふ、昨日老鶯の聲を傷みたる耳に、今日は杜鵑の音を偲びて、四月末つかた、山又た山へ分け入りしに、ある日突然として目前に出で來りしは、身丈八尺あまりも有るらんと思はるゝ獵夫なりき、骨高く、筋太く、青色の小袖を着て、脊に弓箭を負ひたるが、莞爾に近づきて

『上人は何れへ行す、此の邊りには見も知らぬ御僧なるが……』と問ひぬ

姿容こそむくつけなれ、言語卑しからず、引きつれたる黑白二頭の犬、手足の如く懷きて、毛色の美はしき事類なし、尋常の獵人にてはあるまじと思ひたれば、阿闍梨は簡短に事の仔細を物語りて後

『御身は此の邊を跋渉して、よく地の理を知りてぞあらん、相應しき地形あらば敎へ、望むまゝに報恩せん』と云ひ續けぬ

獵人は點頷きて

『御意具に解り申した、やつがれは南山の犬飼、名も無き賤夫にておはせど、所

知の山地一萬餘町、その中に平原の幽地おはします、紀伊國伊都郡の南に當りて、靈瑞至りて多きを見申す、早やおわしませ、御案内申し上げうに……』と素朴にして且つ淡泊なる返答しぬ

阿闍梨は神佛の御告かと嬉しく

『さらば往かん、偏に嚮導を賴み入るぞ』

此の邊り阿闍梨の爲めには、皆な二十餘年前の舊跡なり、一樹の松杉、一峰の青翠、何れか思ひ出の資ならざるべき、前に立つ獵夫の後に從きて、次第々々に南へ行く

二頭の犬は、尾を掉り、舌を吐きて、半町あまりさきを駈けぬ、春の色は躑躅杜鵑花の花に殘りて、青葉の間に丹き心燃ゆるが如く、夕の名殘は谷川の波に見ねて白く走る水の上に、清しき思ひ浮ぶに似たり

犬はその間を駈け、人はその後に從きて進む、山寺の鐘靜かに鳴りて、嫩葉の露、しと〳〵と笠を撲つ、此の時案内の獵人は、只ある樹蔭へ駈け入りしよと見ね

たるが、何處へ行きけん立ち所に姿失せて、犬の影すら見ねずなりき、阿闍梨は異みて、東西南北を見廻しながら

『獵師のぬし、獵人の主』

幾度も呼びたれど、麓を流るゝ大河の音蓼々と聞こゆるのみ、誰答うる者も無く綿草鞋の下より夕暗立ちて、樹の間に新月の影閃く、阿闍梨は暫く佇みて、獵人や出で來ると待ちたれど、遂にその樣無かりしかば、やがて獨り歩みを運びて、細道の露踏み分けつゝ進むほどに、日のとつぷりと暮れ果てし頃、紀伊國の境界紀の川の畔に出でぬ

暮風蕭々として芦の芽を吹けば、青き葉末より露溢れて、流星の消ゆるが如く消ゑ去る、水の瀨は白く、水の淀みは黑く、夢の如く岸邊に立てば、旅情襟に上りて天地の德相前に現ず、只見る一町あまりの彼方に、ちら〳〵と燈火光りて、藁屋の軒に星一つきらめきぬ

（二）

『これは行き暮れた旅の僧ぢや、一夜の宿を賴み入る』

阿闍梨は門邊に立ちて、ほと〳〵と戸を叩けば、裡面には應と答うる聲して、徐に扉を押し開きぬ、蚊遣の烟、むら〳〵と簇る處、一穗の魚燈幽に照りて、佛壇に燒く香の勾ひ騰る間、五十餘りと見ゆる漢子、念數爪操りて殊勝氣に陀羅尼經を誦し居たり

阿闍梨の入り來るを見て

『草舍ぢや、饗應は得せぬ、一夜の宿は仔細おわさぬ、まづ此方へ昇らしめ』

率直なる聲に心切は罩りたり

『さらば雜作に預かり申す、怨させ』

阿闍梨は座に通りて、慇佛に懃壇を禮拜しぬ、一椀の粟粥、一片の畑の物、折敷の上は淋しけれど、主人の眞心それに副へば、山海の珍味にも優りて味好く、阿闍梨は辱く喫べ終る、主人は打ち解けて

『旅の御僧、何れより何れへ跋らせたまふ、見參らする處、京の聖と存じ申す』

詞徐かに問ひ掛けぬ

『されば此れは一所不定の旅の者、只管に禪院建立の靈地を探り歩く、それについて今日は奇しき獵人に遇ひ申した、此の邊りに心當りおはしまさぬか、まづ聽かせられ』

阿闍梨は大和宇陀郡の山中にて出會ひたる身丈高き獵人と、毛色の光澤極めて好き黑白二頭の犬の事、樵夫などの通ふ山路を分け登りて、日もやゝ暮れんとせしまでに至りし事、忽然として獵人の姿を見失ひたる事、犬も又た行方知れずなりたる事、そこより眞直に山を下りて、圖らず當家へ止宿せし事など、殘り無く物語りぬ

主は、耳を傾けて聞き居たるが、やがて長き眉を引き動かして

『丈高く、黑白二頭の犬を引き伴れたる獵人の事、此の邊りに聞きもせぬ、又た見たることも在しまさぬ、ぢやが、獵人の申しつる幽地には心當りござり申す、此處よりは南方、紀伊國伊都郡の正面とこそ推量申せ、幾里の原山の上に續きて、三方に峰連り、辰巳の方に山門開く、萬水は東に流れ、末は一つに聚りて、澎湃と谷

に響く、奇峯常に聳ねて壹の山清く、靈光間なく現はれて、夜の塲貴きこと、今仰せられた獵人の詞によく合ふ、兎まれ、明日の朝ともならば、野生案內し參らせう、長途の山旅、勞れてやおわさん、心靜かに休ませられ、夏の初も末となれど、此の邊は山氣冷ねて、夜は殊さら肌寒う覺ね申す、圍爐裡に疎朶の火は絕ねじ、此の近くにおわしたまへ』

妻にやあるべき、白雪を戴きたる老婦、枯枝を取り來りて、つぎ〳〵に爐へさし入る、山氣よりは老人の眞まづ身に滲みて、阿闍梨は心嬉しく眠りに落ちぬ

（三）

ほの〴〵と天は明けぬ、阿闍梨は夙く起きて、口を嗽ぎ身を淨め、佛壇の前に坐を占めて、朝の勤行懇切なりき

朝食の終る頃、主は外より皈り來りて

『和上樣御德輝き渡りて、今朝は天晴れ、風凉しう、さのみ暑さも覺ね申さぬ、いで御案內申し上げん、御草鞋はこれにおわす、御錫杖もこれに在す、早や來ま

せ』

山道一ばいに主の眞滿ち續きぬ

阿闍梨は厚く一夜の禮を述べて、爪さき上りに山を上るに、昨日姿を見失ひたる黑白二頭の犬、何處より來りけん、さきに立ちて駈け行く、阿闍梨は奇しく思ひながら進むほどに、蟬時雨森に落ちて、朝日麗に峯を照らす、道嵯峨たれど足輕く、少時にして件の原に至り着きぬ、案内の山人は顧みて

『丈高き獵人の申しつるは此處か、まづ御見分あらせたまへ』と云ひぬ

由つて地形を尋ぬるに、雲は連峰を捲いて出で、岩は石鏡を開いて明く、東西は龍の臥すが如くして、清冽の水澄みて流れ、南北は虎の跪るが如くにして、菩薩も又棲み給はん、寔に國城を建つるに適ふ、然もむかし大峰山の修行を終りて、阿波へ渡らんと志したる時、圖らず此の山上の平原を踏みたる事あり、禪院所立の地として天下無双の妙境ならんと、感じたるを思ひ起す、思へば奇緣深かりしよ、思へば佛陀の導きに由りて、再び此の勝地に來りしならんか

心の中に斯く感じて、只ある老樹の下に立つ時、案内の山人はつと寄りて、耳の傍に口を寄せつゝ

『われは是れ此の山の主なり、則ち有らゆる領地を献らせて威福を增し申さんや』と囁きぬ、今までの聲とは異りて、神々しき事限り無く、微にして胸に徹へぬ

阿闍梨は姿凛々しく立ち居たり

『われは山水にのみ狎れて居たるよ、麁き人氣に狎れて居たるよ、然も今日は菩薩に遇ひて、所領の地を捧げ參らする、上もない幸福ぢや』

訴うるが如く、歡ぶが如く獨して語るかと思ふ程に、忽然と姿失せて、後には白雲むら〳〵簇り、二頭の犬尾を掉りて、別れを告ぐる如く麓の方に向ひて啼きぬ

（四）

阿闍梨はいよ〳〵奇異を感じて、二頭の犬を案内にしつゝ、山又た山を巡檢す、雲に入る梯は無けれど、銀漢程近く攀ぢて月の世界にも至るべく、口に靈藥は嘗めざれど、直に神窟を見る想ひあり、日漸く西に沒れて、谷の水音暗に包まれ、法

衣の袖に暮の風冷かなり

やがて天野へ出て・今より山を下らんとしつゝ、犬の案内に任すべく前の方を見遣る時、美はしき女の神、忽然として現はれたまひて

『われは丹生都比賣なり』と宣はせぬ

阿闍梨は法衣の袖を掻き合せて、心より禮拜しぬ、女神は御聲いよ〳〵美はしく

『此の山は吾れ昔人世にありし時、二柱の御神より家地として賜はりたる所なり、東は大日本國を限り、南は海、西は應神山の谷、北は日本川を限る、然もわれ神の道にありて、威福を望むこと久しかりしに、今日菩薩の來ましたる嬉しさよ、されば昨日今日我子等を遣はして、此の所へ迎ね參らせぬ、長く此の家地を供養して、信仰の意を彰はさん、願はくば彌勒如來下生して、龍の華く曉まで、多くの人を導きたまへ』

更に斯く宣はせつゝ、山の頂へ伴ひたまふ、阿闍梨は後より從ひて、やゝ一二町がほど來つらんと思ふとき、燦然たる光明忽ち虛空に輝きて、きら〳〵と胸を

射りぬ、そも何物ならんと異みつゝ見上ぐれば、鶴や棲むらん老松の樹梢に、曾て明州の海岸より投げたる三鈷金剛杵、淡紫の雲に裏まれて懸り居たり、不思議や十餘年前に異國の海を舟出する時、心に深く誓ふことありて投げたる三鈷金剛杵、君子の操翠濃き老松の梢に懸り居たりき

獵人の口よりも、山人の口よりも、夜は靈光現はると云ひたるは、此の三鈷杵久しき前よりこゝに懸りて、明星の下、夜月の前、燦然として輝きたるならん

歎ばしくも貴や、正しく密敎相應の靈地ならん

阿闍梨は急き三鈷杵を取りおろして、事の次第を女神に奏しぬ、女神も因緣の淺からぬを感嘆あらせられて

『吾れも又た密敎を擁護せん』と誓はせたまひたるぞ貴き

丹生津比賣神は、天照大神の御妹にて、稚比留女尊と稱へ奉る、父尊の神勅を畏みて、神武天皇長髓彦を御征伐あらせたまふ時、丹生川の上に降らせたまひ天皇の御夢に入らせられて、勝軍を護らせたまひき、高野山の經營成就したる時、

勸請して山王と崇め奉る、一の御子高野大明神及び十二子一百二十の眷屬一社となりて、靈山を護らせたまふ

（五）

阿闍梨はこゝに無上の靈場を得たるを歡び、明神擁護の誓ひを得たるを喜び、三鈷金剛杵の利驗を得たるを欣び、急ぎ都へ走せ歸りて『於紀伊國伊都郡高野峰被請乞入定處表』を上りぬ、これその年六月十九歳なり

此の表まことに野山の基礎なり、此の表まことに野山開發の聲なり

沙門空海言す、空海聞く、山高きときは雲雨物を潤し、水積るときは則ち魚龍產化すと、是の故に舊聞の峻嶺には能仁の迹休まず、孤岸の奇峯には觀世の蹤相續ぐ、其所由を尋ぬるに、地勢自爾なり、又た臺嶺の五寺には、禪客肩を比べ、天山の一院には定侶袂を連ぬること有り、是れ則ち國民の梁なり、伏して惟れば我朝歷代の皇帝心を佛法に留めたまへり、金刹銀臺櫛の如くに朝野に比び、義を談ずる龍象、寺毎に林を成す、法の興隆是に於て足んぬ、但恨むらくは、高

山深嶺に四禪の客乏しく、幽數究巖に八定の賓希なり、實に是れ禪教未だ傳はらず、住處相應せざるの致す所なり、今禪經の說に准ずるに、深山の平地尤も修禪に宜し、空海少年の日、好んで山水を涉覽して、吉野より南に行く事一日、更に西に向つて去ること兩日程にして平原の幽地あり、名けて高野と曰ふ、計るに紀伊國伊都郡の南に當れり、四面高嶺にして人蹤蹊絕ねたり、今思はく、上は國家に奉ずる爲めに、下は諸の修行者の爲めに、荒藪を斫り夷けて、聊か修禪の一院を建立せんとす、經の中に誡めあり、山河地水は悉く是れ國主の有なり、若し比丘他の許さゞる物を受用すれば、即ち盜罪を犯す者なり、加以ず法の興廢は悉く天心に繫れり、若くは大、若くは小、敢て自由にせず、望み請ふらくは彼の空地を賜ふ事を蒙つて、早く小願を遂げん、然らば則ち四時に勤念して以て雨露の施に答へしめん、若し天恩允許せば、請ふ所司に宣付したまへ、輕しく宸扆を煩して、伏して深く悚越す、沙門空海誠惶誠謹んで言す

阿闍梨の此の表は、主殿助布勢海によりて傳奏せられ、天許滯りなく、同じき

七月九日官裁の紹旨を下さる、阿闍梨歡喜して泰範實惠の二法弟を高野の山にのぼし、遠かに荒藪を拓き、一兩宇の草庵を建つべき旨を命じき

當時太政官より紀伊の國司に下されたる符に、空地一處、伊都郡以南に在り、東は生川和上峰を限り、南は當川南長峰を限り、西は應神山谷を限り、北は紀伊川を限り、十禪師空海に賜はるべき旨を記されぬ、此の符は二十八日國司より三郡の郡司に下され、案文は公家より阿闍梨に進らせらる、阿闍梨この案文を書寫したるに、畏れ多くも嵯峨天皇御手判を賜ひたるが、今は國寶として高野山御影堂に藏めらる

これに由りて野山一帶の靈地は、阿闍梨入定の地と定まりぬ、阿闍梨が一代の事業として建立さるべき密敎眞言永久の伽藍地と定まりぬ、國家鎭護の道場と定まりぬ、國民の梁と定まりぬ

（六）

その年秋の末より冬の半にかけて、天皇御惱おはしたれば、阿闍梨は高雄の山房

に諸弟子僧を集め、十月朔日夜より御厄除の法を修し、同じき八日終りたれば、謹んで加持水一瓶を御手許へ奉進し、願はくは以て藥石に添へ不祥を除却あらせたまへ、と奏聞しぬ

翌れば弘仁八年春もやゝ半ならんとする頃、高雄の山房を出で、高野山の深嶺に入る、斯くて伽藍造營の初に當り、內外に大結界を修す、その啓白文こそ莊重雄大を究めたりけれ、左の如し

沙門遍照金剛 敬て十方の諸佛、兩部の大曼荼羅海會の衆、五類の諸天及び國中の天神地祇並びに此山中の地水火風空の諸鬼等に白さ〳〵、夫有形有識は必ず佛性を具ふ、佛性法性法界に遍くして不二なり、自身他身一如と與にして平等なり、之を覺る者は常に五智の臺に遊び、之に迷ふ者は毎に三界の泥に沈む、是の故に大悲大日如來獨り三昧耶の妙趣を鑒みて、六趣の塗炭を悲嘆したまふ、如實智の雷法界の殿に震ひ、秘密の曼荼閻浮提に傳はる、金剛薩埵龍猛菩薩に傳授せしより師々相傳の今に迄るまで絕ねず、遂に弘敎和尙 辨正三藏をして、錫を振

つて東來して、漢地に流傳し、群生を扳濟せしむ、然りと雖も地泓海を隔てゝ人機未だ熟せず、敕秘閣に韞んで、未だ此朝に及ばず、某甲幸ひに諸佛の加持力と幽明機熟の力とに賴つて、去し延曆二十三年を以て、彼の大唐に入り、大悲胎藏及び金剛界會兩部大曼荼羅の法、幷びに一百餘部の金剛乘を奉請して、平かに本朝に歸りき、地相應の地無く、時正是の時に非ず、日月荏苒として忽ち一紀を過ぎたり、爰に即ち輪王運を啓いて此法を弘めんと擬す、必ず須く其地を得べく四遠を簡擇し、此地を卜食せり、是故に天皇陛下特に恩璽を下して、此の伽藍の處を賜へり、今上は諸佛の恩を報じて密敕を弘揚し、下は五類の天威を增して群生を扳濟せんが爲に、一ら金剛乘秘密敕に依て、兩部の大曼荼羅を建立せんと欲す、仰ぎ願はくば諸佛歡喜し、諸天擁護し、善神誓願して此事を證誠したまへ、所有東西南北四維上下七里の中、一切の惡鬼神等は皆な我結界を出で去れ、所有一切の善神鬼等の利益有る者は、意に隨つて住せよ、又願はくば此の道場は普く五類の諸天及び地水火風空の五大諸神、幷ひに此の朝開闢已來の皇帝皇后等の

尊靈一切の天神地祇を以て檀主と爲す、伏して乞ふ一切の冥靈、晝夜に擁護して此願を助け果せ、敬つて白す

此にて知る、野山の靈場は、代々列聖の大靈魂その基礎となりて、國家鎭護の光輝、一天四海に遍照することを、何等快文字、讀み去り讀み來りて、親しく、阿闍梨の大勇猛心、阿闍梨の大慈悲心、阿闍梨の大光明心に接する思ひあり、欽すべく敬すべし

（七）

やがて地を相して根本大塔を建てらるゝに定まり、基礎を鎭めんとして地を鑿りたるに、地中より一尺八寸の靈劔、金銅の經軸、及び輪壺の三寶物現はれぬ、殊に靈劔の銘に『釋迦如來說法地、加葉尊者成道處』と彫みありたるにて、過去の佛土に紛れなきこと明瞭しぬ、即ち根本大塔を中心にして、四維七里を淨域と定め、飛空の三鈷杵を摸したる物三箇を作り、四境の峯に埋めて、山根を結護し、八葉の峯、九品の谷に、八葉九尊を表し、こゝに壇場を建立して、七里四方を結界しぬ

その啓白の文に『我今此の地は是れ我之地なり、我今七日七夜の都大道場法壇の會を立てゝ、一切の十方法界の諸佛世尊と及び般若波羅密多と、諸の菩薩衆の諸の徒衆を領せるとを、一切秘密の法藏難思議の法門に決定せんと欲ふ、故に諸の勝成を取つて護身結界の法事を欲ふ、此の伽藍の東西南北四維上下に於て、所有一切の正法を破壞せん毘那耶伽諸の惡鬼神等は皆悉く我結界の處七里の外に出で去れ、若し正法を護らん善神鬼等の我佛法の中に利益有らん者は、意に從つて而して住して此の伽藍に於て佛法を防護せよ』とあり、更に進んで『此の伽藍如來像の前に於て、諸佛子等同法一心に佛法を住持し、四恩に報ひ奉り、有情を饒益して、金剛軍荼利菩薩法に皈命せよ、七日七夜の作法結界懺悔拜禮す、至心に三寶殿恩重の敕主釋迦尊と大威力を具する神呪心と、善護能化の觀世音と、金剛軍荼利菩薩との諸聖衆と藥王藥上救脫菩薩との諸の聖衆と、金剛藏王菩薩との諸の聖衆と梵釋四王龍神等の護法の諸天影響衆とを勸請したてまつる、道場に來入し、法事を證成し、我が勸請に於て哀愍攝受したまへ』と結ぶ、天下無双の靈場たるを

知るべし

大護軍荼利明王結界の作法は、金剛墻者三鈷金剛を編つて之を廻す、四維七里は山根を尋ね、その外邊を連ねて結界し、南方を寶珠ヶ峰と名け、北方を覆鉢の峰と名け、外廓に之を廻す、東方を摩尼ヶ峯と云ひ、西方を阿彌陀か峰といふ、此の金剛墻の上に於て、金剛網を覆ひ、丑寅の鬼門に入定の處を點じ、未申の人門に大路を開く、此の間遠きは四十有餘町、東方を不動の峰と云ひ、小さき峰四あり、一を普賢の峰二を山王の峰、三を伊頭久志美の峰、四を與呂古比の峰と名く、南方を寶珠の峯と名け、これにも四の小峰あり、五を多加羅の峯、六を比加利の峰、七を波多保古の峯、八を惠美の峰と名く、西の方阿彌陀の峰に依て人多く往生を得るなり之に屬するを觀音の峰、文珠の峯、轉法輪の峰、加多羅比の峰と名く、北の方覆鉢の峰は釋尊の寶處三昧耶を表す、之に屬するを志和佐の峰、萬保利の峰、藥刄の峰古牟志の峰と名く、阿闍梨は中央蓮臺の中に座し、七日七夜の間諸弟子と共に此の結界を修したるなり、之に由つて、佛法を障碍する惡鬼邪神、影を潛め、正法を守

る護法善神のみ此の處に影向あるが故、古は五障の女人影を此の處に指さず、惡業の輩歩を此の山に運ふこと能はざりき

此の結果修法と同時に、大塔の下より現はれたる經軸は轉軸山に埋め、靈劍と輪壺とは舊の地中に埋めて、鎭壇の資としたりき

阿闍梨の入山と共に、京より諸の番匠を登らせ、修禪の堂宇僧坊を建立させ、續いて七間四面の講堂を造營しぬ、七々は兜率の內院四十九重の摩尼殿を表示せるなりと聞こゆき

御遺告　其十八

方に吾が上登の日、巫祝に託して曰く、妄神道に在つて威福を望むこと久し、方に今菩薩此の山に到る、妄が幸なり、弟子昔現人の時に、食國鹽命家地を給ふに、萬許町を以てす、南は南海を限り、北は日本河を限り、東は大日本國を跨り、四は熊神山の谷を限る、冀くは永世に献して信仰の情を表すと云々……

第二十五章　いろは歌

（一）

高野山の堂塔造營に心力を傾注する中にも、有情の群類を濟度するに於て、一日の安居だも得ざりき

即ち弘安八年十月二十四日には、相州駒形山の權現に詣でゝ靈効を示し、翌九年の春は、天下に疫癘流行して、その災に罹る者數を知らず、五畿七道に叫喚の聲滿ち、津々浦々に無常の風吹き渡りて、慘禍目も當てられず見ねければ、主上深く宸襟を惱ませられ、嵯峨の離宮に阿闍梨を召させたまひ『いかにして癘鬼を驅るべきぞ、疫癘は鬼あつて災を降すと聞く、術あらば奏聞せよ』と宣はせられたるに答へ奉りて『さればにて候ふ、疫癘を驅るの法は、般若の智火を轉じて衆生の業垢を淨むるにあり、衆生の垢盡くる時、疫鬼依る所無く滅び候はん』と奏しぬ

主上はこゝに於て、親しく紺紙金泥もて『般若心經一卷を書寫したまひ、疫癘驅除の爲め、講讃を爲すべく、勅あらせられたれば、即ち信心を傾けて供養し奉る

結願の式未だ終らず、忽ち疫病の退散を見たる事あり、その年四月廿七日には、勅に由りて、宮城南門並びに應天門の額を書し、十一月十六日漸く暇を得て高野山へ皈り造營の監督に從ひき

翌十年六月一日兼て造營中なりし大塔の心柱を虎か峰に造り、同じき二十八日壇上に曳くことゝしぬ、實惠法師其の奉行たりき

實惠は屈竟の杣大工十六人を選みて、一大法師二大法師の二手に分け、曳々と運ばせぬ、然も阿闍梨の佛心は止む時無し、一もとの草木にも、一介の昆蟲にも、眞言の功德を授けんとする本願は、その機會に遭ふたびに、油然と湧き出でぬ

（二）

杣大工は無智の輩なり、されど前世に聊の德を栽ゑたる事あればか、伽藍造營の勞役に從事することゝなる、手傳ひ得ぬ、望むらくば彼等にも眞言の德を敎へて成佛の端を得させんと思ひたれば、やがて二樣の印明を授けて、今の大工手傳が音頭を取りて謠ひ囃す如く、一大法師の組には『バ、サラ、ダ、ト、バム』、二大法師

の組には『ア、ビ、ラ、ウム、ケン』と謠はせぬ、斯くて口に眞言を云ひ馴るゝ中には、やがて眞言の功德を受け、やがて心に佛性を得て、知らず識らずの間に、成佛の基を作るならんと思ひたればなりき

されば此の二句の眞言は、梵字に片假名（片假名も又た阿闍梨の作たること、近世に至りて、學者間の定論となれり）を付けて杣大工に與へ置きたるが、兎もすると遺忘れて、夕暮には頭を搔くもの少からず、阿闍梨切角の思ひ付きも、遂に其効無く見ねき

されど一たんの因緣を捨つべきにあらず、橫より試みて効なき時は、更に竪より試み、上より試みて驗なき時は、更に下より試みて、到頭望みを遂ぐるにあらずば濟度の手を止めぬは、眞言の主義にして又た阿闍梨の心切なり、杣大工など下々の者は、口に眞言を云ひ馴れず、目に梵字片假名を見馴れねば、遂に忘れて佛心に遠ざからんとするも理なり、さらば我れ汝等の爲めに、謠ひ好く、學び好く、然も解り好き歌を授けやらんとて、涅槃經四句の偈を基礎に、作り與へたるが「いろは」

歌四十七文字なり

涅槃經四句の偈とは「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂」なること誰人もよく知る處、然も四句十六字に一切佛法の肝心籠り、八萬四千の教法攝まり、世出世間の樂果又皆な此の中より生じ來る、されば佛菩薩はこの四句を、如意寶珠として珍重ありき

されば此の四句の意を解せん者、直に金剛座に入るべく、直ちに涅槃常住の身となるべし、阿闍梨は此の貴く有難き經文中の肝心を和譯して、之を大工杣人結緣の資としたるなり

即ちいろは歌四十七字を、漢字に當てる時は「色雖匂散、我世誰常、有爲奥山今日越、淺夢不醉」の四句となる「色は匂へど散りぬるを」は諸行無常の句に當り「わかよたれそつねならむ」は是生滅法の句にあたり「うゐのおくやまけふこえて」は生滅々已の句に當り「あさきゆめみしゑひもせす」は寂滅爲樂の句に當れり、阿闍梨にしては、只大工杣人の爲めに、四句の眞言に代ゆべき四十七字の短

歌を作りたるに過ねど、此即て萬歳不滅の大文字となりて、凡日本に生を得たる者物心付き初むる赤兒の口にも、いろは歌を唱はざるは無く、假にも筆を持つ程の者まづいろは歌に墨を染めぬは無きに至る、まことに阿闍梨一夜の作が一面には字母の發明たり、一面には教育の根本たり、更に他の一面には世界に二つとなき文學の花と香りて、今後幾千萬歳の後まで、凡そ日本國民のあらん限り、四十七字の功德傳はらん

もし我國にいろは歌四十七文字の發明なからましかば、今日の文明を容易に見ること能はざりしならん、大師のいろは歌は、野山大塔の心柱を造る爲めに作られたるにはあらで、正しく日本文明の根源を築く爲に作られたるものなりき、されば日本に生れて大師の功德を片時にても忘るゝ者あらば、子として父母の恩を忘るゝと同じかるべし

斯くして成就せる大塔は、多寶塔にして高さ十六丈あり、内證十六菩薩一体無二を表す、一層の勢ひ、まことに數重の塔に勝れり、中に一丈八尺六寸の大日如來一

体と、一丈四尺の四佛（胎藏皆な金色、五佛とも大師の作なりしが、惜いかな炎上の時燒け失せて、僅かに釋尊一佛を出せしのみ）を安置し奉る、扉の高さ一丈六尺、外院十六現在菩薩聖集の同体を示す、十六本の柱には悉く曼荼羅を圖繪したれば、莊嚴美麗海内無比とぞ聞こゑし、即ち金剛峰樓一切瑜伽瑜祇經に緣を取りて金剛峰寺と號けられぬ

御遺告　其十九

如今件の地の中に有る所の開田を見るに、三町許なり、常庄と名くる是なり、吾れ去し天長九年十一月十二日より深く穀味を厭ひて專ら坐禪を好む、皆是れ令法久住の勝計、井びに末世後生の弟子門徒等の爲めなり、方に今諸〳〵の弟子等諦かに聽き諦かに聽け、吾の生期今幾ならず、仁等好く住して教法を守れ、吾れ永く山に歸らん、吾れ入滅せんと擬するは、今年三月二十一日寅刻なり、諸の弟子等悲泣を爲すこと莫れ、吾れ即し滅せば、両部三寶に歸信せよ、自然に吾に代て眷顧を被らしめん、吾生年六十二臘四十一なり……

第二十六章　入定

（一）

阿闍梨は野山堂塔の造營に暇なき間、都にては最澄表を上りて、比叡山に戒壇を建立せんとしたるより、南都七大寺の物議を招きて、爭論難議鼎の湧くが如く南都の大德より迷方示正論を出だせば、最澄は顯戒論三卷を上りて相對峙し、此の爭ひいつ果つべしとも見ねざりき、阿闍利は双方に情誼あり、何れに加擔せんやうもなく、且は渦中に卷き込まれて、名聞の巷に入るも慵く、一は佛界の不祥爭論早々鎭定の祈願をこむべく、野山の經營を實慧眞然等に托し置き、七月二十六日眞濟幹海等を携へて、豆州より野州へ赴き、補陀洛山（前に二荒山といふ）に上りて諸名區を歷覽しき、山の名を日光と改めたるは此時なり、十二月に入りて京へ歸りぬ、南都北嶺の爭論やゝ鎭まりたる如くなりき

此の行脚の留守中（十月二十日）主上は勅書をもて、傳燈大法師位記を賜はり、内供奉十禪師に任ぜられき

（二）

阿闍梨は當時の高僧大德が、兎もすると權勢の奴隷となり、名聞の爲めに爭論難議を事とする間に在りて、專念佛法の爲めに盡し、一意密敎の弘通に努めて、名を求めず、地位を索めず、瓢然と錫を曳きては野山の靈境に遊び、更に京都へ出て、天機を伺ひ奉る外、東西南北を巡歷して、只管敎化に心を盡したれば、主上の御歸依いよ〳〵深く、朝野の信望ます〳〵厚きに、遠き高野の山に入りて、一月二月三月の久しき下山せぬ事さへあり、京都を距ること遠きに過ぐれば、便宜好き地に永世眞言の道場を定むべしとて、弘安十四年正月十九日正三位右近衞大將兼民部卿藤原朝臣良房を勅使として東寺を賜ひ、師々相傳の道場、鎭護國家の祈禱所と定むべき旨御沙汰ありき、阿闍梨は有難く御旨を領して、將來の法文、曼荼羅、道具等を經藏に納め、灌頂壇を建て、眞言長者の住地と定めぬ、主上親しく東寺に御幸ましまして、灌頂を受けたまへるも此の年なり

同じき四月御位を皇太弟大伴親王に讓らせたまふ、淳和天皇これなり、此の時阿

闍梨は高野にありしが、嵯峨上皇勅して京へ召させたまひ、治部省に止め置きて一月あまりも法を修せしめられき、新帝も又た阿闍梨に御歸依深かりければ、高野往返の宿所にとて、大和國高市郡飛鳥川原の弘福寺を賜ひたるぞ畏き

弘安十五年正月十一日改元ありて天長元年となる、此の春天下大いに旱して蒼生皆な枯れぬべく見ねたれば、主上即て勅して、神泉苑に雨を祈るべく命じ給ひぬ、阿闍梨は畏みて池の邊に壇を設け、實慧、眞雅、眞紹、堅惠、眞然を隨へて惠果和尙傳來の請雨經を讀誦し、一心に法を修し、雨を祈りたれば靈驗立ち所に現はれて、結願の日猛雨沛然と降り來り、天下蘇生の想ひありき、主上叡感斜めならず、二十五日少僧都に任じたまひぬ、律師にも至らず、直ちに少僧都に補せられしは例なし、阿闍梨は四月六日表を上つりて辭退したれど勅許なかりき

同じき六月六日東寺に敎王護國の號を賜はり、勅して阿闍梨を別當に補せられき、これを眞言長者の始めとす、翌年四月二十四日主上御願に由り、講堂を建てゝ法を修す、斯るほどに二月十四日阿闍梨第一の高足たる智泉法師高野東南院に入滅

しぬ、阿闍梨の嘆き譬へんに物ぞなき、即ち追悼文を作りて「哀い哉々々哀中の哀悲い哉々々悲中の悲」と云へり

天長四年五月一日太極殿に於て再び雨を祈りしに、此の時も又た驗ありしかば、二十八日大僧都に任じたまひき、さま〳〵に御辭退ありしが御允し無し

同じ九年八月二十二日上表して高野山に萬燈萬華の二會を行はんことを乞ひ、九月二十四日勅許ありて、滯りなく修行あり、十方三世の諸佛を供養し畢りぬ

翌十年主上御位を皇太子正良親王に讓りたまふ、仁明天皇これなり.

（三）

天長十一年正月三日改元ありて、承和元年となる、空海大僧都こゝに六十一歳を迎ねましき

正月某の日、勅に由りて後七日の法を中務省に修し、二月は東大寺に入りて、再び心經の秘鍵を修し、春もやゝ暮れんとする三月の半金剛峰寺に還り來ましぬ

然して末弟々子の爲めに女犯の大惡罪たることを誡めて後、皆が聞け、此宗の大

事を傳授する阿闍梨は是凡夫業生の人に非ず、密嚴淨土に於て空海と契約あるに依て、此の金剛乘を流布するなり、爰を以て一字千金の恩は多生にも報ひ難く、三密瑜珈の德は億劫にも酬ひ匡し、仍て一印一眞言を傳授する阿闍梨に於ても、大日覺王の如く之を歸敬す可し、座を去る事七尺にして師の影を踏む可からず、師の床に坐すべからず、此の傳法の阿闍梨は是我が身なり、十一面觀自在尊の分身なり、設ひ懶惰懈怠亂行五辛肉食を犯すと雖も、一言の罵辱謗難を加う可からず、若し惡言を以て誹謗を與うる輩は、咎千佛を殺害するに超ねたり、後代の行者此の誓狀遺告の旨を守つて三密の修行を勤むべきのみ、と告げ、別に師恩の重きを誡めぬ

超ねて五月二十八日重ねて諸弟子を集めて、夫れ剃頭著染の類は我が大師薄伽梵の子なり、僧伽といふ、僧伽とは梵名なり、飜して一味和合と云ふ、意を等うして爭論無く、長幼次第有ること、乳水の別無きが如く、佛法を護持すること、鴻雁の序有るが如くして、群生を利益せよ、若し能く已を護れば即ち之を佛弟子と名く、若し斯の義に違はゞ、即ち魔黨と名く、佛弟子は即ち是我弟子なり、我が弟子は即

ち是れ佛弟子なり、魔黨は我弟子に非ず、所謂旃陀羅の惡人なり、即ち佛法國家の大賊なり、現世には自他の利無く、後生には即ち無間の獄に入らん、無間の重罪人は諸佛の大慈も覆ふこと能はず、菩薩の大悲も救ふこと能はざる所なり、汝等熟々出家の本意を顧み、長兄は寛仁を以て衆を調へ、幼弟は恭順を以て道を問へ、賤貴を謂ふことを得ず、一鉢單衣にして煩擾を除き、三時に上堂して本尊の三昧を觀じ、五相入觀して無上の悉地を證すべし、五濁の澆風を變じて、三覺の雅訓を勤め四恩の廣德を酬ひて、三寶の妙道を興せ、此れ吾が願ひなり、と告げぬ、これ第二の遺誡なり

大僧都入定の事早や定まりて、今は如何ども爲んやうなし、眞如親王即ち末世諸弟子戀慕の心を休めんが爲め、御影を寫し置かばやと思召したれば、日ごと御座所の次の間に參りて、密かに影像を描かせられぬ、大僧都早くもそれと知らせたまひ『われ開眼せん』と宣ひぬ

眞如親王は恐れ畏みて、漸く書き上りたる御影を參らせたれば、大僧都直に筆を

取りて眼睛を點じたまひたりき、高野山御影堂に崇め祀れるはこれなり

斯りし程に九月一日自ら入定の處を八葉の峰の艮位に當る奥の院に定めたまひ、同じき十三日東寺に於て両部不二の秘印を實慧眞雅兩法師に授けたまひ、同じき十五日金剛峯寺開創の緣起を起草したまふ、世に云ふ御手印緣起は是なり、畏くも主上御手印及び御國判を下したまひたればなりき

（四）

十一月十五日は天淡曇りて、落葉そぼろに禪龕の簷を撲ちて、朝より頭重く覺ゆる日なりき、大僧都は門徒を一堂に集めて、さて曰はく

『諸弟子よく聽け、吾が生將に盡きて、現世を去らんと思ふなり、金剛峯寺は吾れ私の草創なれど、幸ひに御願に預かる、されど造營尙半にして入定の時來りたれば、諸弟子の中に於て相傳の聲を撰ばざるべからず、われつら〳〵考ふるに、實惠禪師は國王の師として德天下に滿ち、事に東寺に預る、私に違あらざらん、眞如親王は他境に御意あり、眞濟は眞言院に候し、眞雅は別人の契約あり、眞紹は別所

建立の思ひあり、堅慧は室生山を離れ難からん、眞然獨り我が蹤を繼ぐ志あれば此山をもて一向に眞然に付屬せん、されど力未だ厚からず、年もまだ若ければ（眞然法師此時三十二）寶惠禪師よく德を加へて、國域の大鎭とせよ、そも〳〵此山は金輪南面の德を鎖めて、寶祚の萬歲を誓ひたれば、天下の南にありて褒げず崩れざるべし、又た實惠には東寺を預く、われの滅後は諸弟子の依師長者たるべく、人の師、國の寶たる事此の人に如くべからず、仍て大經藏の事一向に預く、實惠不幸の後は眞雅處理して封納し開合すべし、又弘福寺をもて眞雅に付し、神護寺をもて眞濟僧正に預く、諸弟子心してわれの付屬に背く勿れ』と告げたまひぬ、これ遺告の三なりき

やがて其年は願ふまじき入定の噂の中に暮れて、明れば承和二年正月六日、上奏して東寺の功德料千戸の內二百戸（甲斐國五十戸、下總國百五十戸）を割りて僧供に充てたまはんことを奏し、直ちに裁可を蒙りたれば、更に奏して五十の供僧を減じて二十四口に定めたり、二十一口は修學錬行の者、三口は即ち三鋼の造治雜

預なりき

その年正月八日、後七日の法を宮中眞言院に修行したり、これ誠に大僧都が宮中に於ける最後の齋會なりき、自ら深く覺悟したまふ所あれば、年々の行事として永久に行はるべく、後年の規模を殘し置かんとて主ら大唐青龍寺の風を移し極めて壯嚴に行ひぬ、此の齋會終りて、兩太上天皇（嵯峨、淳和）にも餘所ながら今生の御別れを告げ奉り、寶祚の不朽を祈り、皇家國土の萬歲を念持しつゝ、四十餘年が間、春の霞、秋の月、往き來るさの送りもし迎へもされたる山々野面に別れを告げて、金剛峯寺に歸りたるは入定の期いよ〳〵近き三月中の初めなりき

即ちその月十五日諸弟子を集めて、懇懃に敎誡し、親しく二十五條の遺告及びに高野住侶の遺記等數本を書して與へられぬ、これ遺告の最後なりき

二十五條の第一は、本書に挿入せる御遺告の本文にして、巳下次々に諸弟子へ對する緣起の條々を記されたり

大僧都はやがて聲を勵まして

『諸〳〵の弟子等明かに聞け、吾の入滅は來る二十一日寅刻と定まる、必ず泣き悲むこと勿れ、吾れ假へ世を去るとも、兩部三寶を歸信せば、自然に御利生あらん、自然我に代りて眷顧を與へ給はん、吾れ生年六十二、臘夏四十二なり、初めは一百歳まで世に住みて、敎法を護り奉らんと思ひたれど、諸弟子の修行成りたれば、こゝに仁等を恃み、急ぎて永く即世に擬するなり、門徒數千萬なりといへども、皆な吾が後生の弟子たらん、祖師の御顏を拜み奉らずと云ふとも、吾が名號を聞きて、恩德の深きを知れ、これ吾が白屍の上に人の勞はりを得んとするにあらず、密敎の壽命を守りつぎて、龍華の三定に到らしむべき計なり、吾れ眼を閉ぢなば、必ず將に都率陀天に往生して、彌勒慈尊の御前に侍り、五十六億餘の後、慈尊に隨ひ參らせて、吾が舊跡を問ひ尋ねん、假へ未だ降らずとも、常に微雲管より見て、仁等が信仰の樣を察せん、その時勤行にいそしむ者は祐を與へ、否らざるものは不幸に導かん、件の遺告、努め〳〵遺失あるまじきぞ』

此の時、しめやかに座に列りしは、實惠、眞濟、眞雅、眞紹、堅惠、眞曉、眞然

の七高弟なりき、餘りに悲しきお詞なれば、誰頭を擧ぐる者もなく、聲を呑みて聽問す

斯くて後は、只管に穀味を絶ちて、一向に坐禪するのみ、諸弟子等は御前に平伏して、彌勒菩薩の法號を唱へ居き

（五）

三月二十一日寅刻となれば、大僧都は結伽跌坐して、大日の定印を結びたるまゝ奄然として定に入り給ひぬ、御眼深く鎖ぢたれば、心ず禪定に入りたまひしならんと推量するのみ、拜み參らせたる處、生身に異らねば、世人の如く荼毘し參らせず嚴然と元のまゝに安置して、七日々々の御忌を修す、さるに顏の色衰へず、鬢髮次第に長くなりて、その光澤少しも異らざりけり、由て剃刀を加へ、衣裳を整へ、五十日を經たる後、七高弟替る〳〵に御輿を奉じ、定身を奥の院へ納め參らせぬ

石壇を疊みて、僅に人の出入するほどとし、その口に五輪の塔を樹てゝ、梵字の陀羅尼を藏め、靈塔を建立して、佛舍利を安置したるは、眞然一向の營みにて後の

事なり

あはれ明星は雲に入りぬ、三鈷の松に春風吹きて、深翠露と共に落ち、大塔の甍に朧月傾きて、清影禽と共に去る、三密寂として聲無く、四衆哀みて涙滿山に漲りたり

大僧都入定の事程もなく都へ聞こゑたれば、主上殊の外御嘆きあり、内舍人を勅使に下されて賻を賜ひ、三日の廢朝を仰せ出だされたるぞ畏き

嵯峨上皇は殊に御歸依深かりければ、院使をもて、賻及ひ御吊書を下し賜はりぬ、身後の榮何物か如くべき、こゝにその御吊文を掲げて、聖意の辱きを忍び奉る

眞言洪匠、密敎宗師、邦家憑其護持、動植荷其攝念、豈圖崦嵫未迫、無常遽侵、仁舟廢掉、弱長失歸、嗚呼哀哉、禪關僻在、凶問晚傳、不能使者奔赴相助茶毘、言之爲恨曷已、思忖舊窟悲涼、可斷令旨、遙寄單言吊之、著錄弟子、入室桑門、悽愴奈何、衆以達旨、

何等優渥の文字ぞ、何等丁重の御慰問ぞ、讀み去り讀み來りて、涙の滂沱たるを覺ゆ

（六）

入定の後二十二年、天安元年十月二十七日文德天皇は大僧正を御追贈あり、更に七年を經たる貞觀六年には清和天皇勅して、法印大和尙位を贈りたまひしが、それより五十八年を經たる延喜二十一年十月二十七日、醍醐天皇勅して、弘法大師の諡號と、檜皮色の御衣一襲とを賜はりぬ、勅使は少納言平惟助卿なりき

惟助卿は時の金剛峰寺座主權大僧正觀賢僧都を案内として、高野山に登り、奥の院に詣でらる、僧都恐る〳〵進みて御廟の扉を開き參らせ、御唐櫃より恩賜の御衣を取り出し供へ奉れば、勅使は威儀嚴かに宣命を讀み奉りぬ

勅ス、琴絃已ニ絕ユレドモ、遺音更ニ淸ク、蘭叢萎ムト雖モ餘芳猶播ク、故ノ大僧正法印大和尙位空海、煩惱ヲ消疲シ、驕貪ヲ抛卻シ、三十七品ノ修行ヲ全フシテ、九十六種ノ邪見ヲ斷ツ、已ニシテ佛日西ニ沒シ、溟海ヲ渡リテ餘輝ヲ仰キ

法水東ニ流レ陵谷ニ通シテ清浪ヲ導ク、密語ヲ受クルモノ多ク山林ニ滿チ、眞趣ヲ習フモノ自ラ淵藪ヲ成ス、況ンヤ太上法皇已ニ其ノ道ヲ味ヒ、其ノ人ヲ追憶ス、誠ニ浮天ノ洪濤ト雖モ、何ゾ積石ノ源本ヲ忘レンヤ、宜ク祟飾ノ典ヲ加ヘ、謚シテ弘法大師ト號スベシ

勅使が謹んで讀み終る時、定中に微妙なる聲聞こゑて

我昔薩埵ニ遭ヒ、親ク悉ク印明ヲ傳フ、无比ノ誓願ヲ發シ、異域ノ邊地ニ陪シ晝夜萬民ヲ愍ミ、普賢ノ悲願ニ住ス、肉身三昧ヲ証シ、慈民ノ下生ヲ待ツ

これ大使の勅答なり

大師は果して在したり、居を高野の樹下に卜して、神を兜率の雲上に遊ばし、日々影響を闕かず、處々の遺跡を撿知す、との誓願、果してその驗ありき

嗚呼玉川の水清し、汲みて濁世の心を洗ふべく、八葉の峯高し、仰いで般若の甘露に沐すべし

弘法大師 終

御遺告 其二十

吾れ初めは思ひき、一百歳に及ぶまで世に住して教法を守り奉らんと、然れども諸の弟子等を恃んで、急いで永く即世せんと擬す、但し弘仁皇帝給ふに當寺を以てす、歡喜に勝へず、秘密の道場と成せり、努力、努力、他人をして雜住せしむること勿れ、此の狹き心に非ず、眞を證るの道也、圓なる妙法なりと雖も、五千の分に非ず、廣き當寺と雖も、異類の地に非ず、何を以てか之を云ふ、去し弘仁十四年正月十九日當寺を以て永く少僧に給はり預けらる、勅使は藤原冥房公なり、勅書別に在り、即て眞言密教の場と爲ること既に畢んぬ、師々相傳して道場を爲すべき者なり、豈に門徒に非ざる者をして猥雜せしむべけん哉。（終）

大正四年四月十五日印刷
大正四年四月二十日發行

不許複製

著作者　渡邊霞亭
發行者　久世勇三　大阪市東區內久寶寺町二丁目十八番地
印刷者　岡本省三　大阪市東區內淡路町一丁目三十一番地
印刷所　大阪活版印刷所　大阪市東區內淡路町一丁目三十一番地

弘法大師奥附
定價壹圓貳拾錢

發行所　大阪市東區內久寶寺町二丁目十八番地
霞亭會
電話南一八〇三番
振替口座大阪二七一五五番

東伏見宮妃殿下御歌　御歌所主事　阪正臣大人謹書
二條公爵題字　土方伯爵題字　九鬼男爵題字
鍋嶋公爵夫人題歌　阿部伯爵夫人題歌　碧瑠璃園著

全一冊

奥村五百子

六月十日發行　特價　壹圓八拾錢

表紙　總クロース洋綴（天金）安江不空畫伯意匠製　釘極莊重（箱入）
紙數菊版四百餘頁
寫眞版　奥村五百子刀自寫眞其他數葉挿入

大阪朝日新聞掲載　碧瑠璃園著

實錄仙臺萩

後編

七月廿七日發行　特價　壹圓

表紙　安江不空畫伯を煩して本會出版部獨特の意匠を施し頗る美裝とす
口繪　北野恒富畫伯苦心の作を以て木版數度刷とし尚霞亭氏が多年苦心集聚に掛る名高の手簡本編の大立者片倉小十郎原田甲斐の手紙等史實的材料を以て全編を飾る

發行所　大阪市東區內久寶寺町二丁目十八番地　霞亭會　電話南一八〇三番　振替口座大阪二七一五五番

三版

天覽

錢屋五兵衛

碧瑠璃園著　合本全一冊　特價壹圓五拾錢

表紙總クロース天金洋綴

紙數菊版五百四十五頁

郵稅內地拾貳錢

三版

吉田松陰

碧瑠璃園著　合本全一冊　特價壹圓五拾錢

表紙總クロース天金洋綴

紙數菊版五百六十二頁

郵稅內地拾貳錢

六版

天覽

金原明善翁

碧瑠璃園著　全一冊　特價七拾錢

紙數菊版三百二十九頁

郵稅內地八錢

發行所　大阪市內久寶寺東町貳丁目區　霞亭會　電話南一八〇三番　振替口座大阪一七一五五番

348
261

8.29

終